

うちはイタチと賢者の 石

おちあい

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

あらすじ

うちはイタチがハリーポッターの世界に転生する物語。

イタチは穢土転生解の後。

ハリーポッターの世界は1980年から。

※

1991年あたりまではほぼオリジナルストーリーになります。

幼少編にはハリーもホグワーツも登場しませんので、そのあたりの絡みを見たい方は

ご注意ください。

t
w
i
t
t
e
r
:

@
o
c
c
c
c
c
h
i

目次

イギリス編

1981年6月8日 | 1

1981年6月9日 | 7

1981年6月9日 ② | 14

戦争編

1985年7月 | 25

1985年7月8月 | 42

1986年8月 | 54

1986年8月 ② | 65

1986年8月 ③ | 79

1986年12月 | 93

1987年1月 | 107

日本編

1987年1月 ② |

イギリス編

1981年6月8日

お前はオレのことをずっと許さなくていい：

お前がこれからどうなろうと

おれはお前をずっと愛している。

：

1980年

目覚めたイタチが最初に見たものは、自分を覗き込む女性の顔だった。

「……」

黙り込むイタチに、女は少し驚いた表情をして、

「おはようー！」

満面の笑顔で挨拶をした。

対するイタチは困惑していた。

(…どういふことだ?)

女を視認した瞬間、イタチは迷わず右手で相手の首を絞めようとし、自分の身体が思うように動かないことに気付くと相手の目を見つめ幻術にかけようとした。全て1秒以下の出来事である。

(…身体が満足に動かないどころか、…チャクラが練れない)

「う…あつ」

(その上喋ることも出来ないか)

にこやかに挨拶をした女はイタチの髪を優しく撫でた。どうやら敵意は無いと判断したイタチは、冷静に状況を把握しようとする。

(そもそも俺はカブトの穢土転生を止めて死んだはずだ。また誰かに穢土転生で蘇らせられたのか? いや、穢土転生体なのにチャクラも練れず身体も動かせないということはあり得ない。だとすると…。ここが冥土というやつか…)

忍の性か本人の性格か、イタチはあまり動揺しなかった。

全てを知ったサスケに本心を伝えることができた。マダラのことは気がかりだがサスケも成長していたしナルト達もいる。

心配は無い。

しかし…仮にここが冥土だとしても、身体の自由が一切無いとはどういう事なのか。

困惑するイタチを、女は軽々と持ち上げ抱き抱えた。簡単に持ち上げられたイタチは

壁にある姿見に写った自分の姿に驚愕する。

(俺が赤ん坊になつてゐる!!)

ここでイタチはある仮説を立てた。

あれはサスケが生まれる前だったか。両親と木の葉の里の外れにある忍寺に行つた時だ。徳の高そうな坊主が輪廻転生の話をしてゐた。長門の使う忍術ではなく仏教の輪廻転生である。

(確か、死んだ人間の魂が現世に戻り新たな人生を送ることを繰り返す。だったか。

しかし新しく生まれ変わる時に前世の記憶は無くなるという話だったはずだが……俺はうちはイタチの記憶と、自分がうちはイタチであるという認識を持つてゐる。さらに……)

「イタチ、なんだが目つきが大人っぽくなつたみたい！可愛いわあ！」

この世界での名前もイタチのようだ。

(よく分からないが、記憶を持ち悔い改めながらまた1から生きろということなのか……?)

うちはイタチ第二の人生はこうして始まつた。

アンナ・内葉（うちは）は魔女である。

ホグワーツ魔法魔術学校ではレイブンクローの寮に所属し、成績の良かった彼女は卒業後魔法省に入省。半純血であるが闇祓い局の闇祓いとして働いている。

元々魔法省の国際魔法貿易基準機構で働いていた母に憧れて入省したのだが、「例のあの人」の力が強まっている事から闇の魔術に対する防衛術の才能があった彼女は半ば無理やり闇祓いの職に就かせられることとなった。

両親の馴れ初めについて二人とも恥ずかしがって詳しく教えてくれないのだが、仕事で一時期日本に住んでいた母がマグルのチンピラに絡まれている所を助けたのが父だったらしい。

当時の父はイケメンだったらしく（今の父からは想像出来ないが）母が猛烈なアタックを仕掛けたのだとか。

結婚してアンナが生まれると、母はアジア地区の担当になり、アンナと両親はアンナが幼稚園の頃から小学校卒業まで日本の岩手県で暮らしていた。

因みにアンナの夫は日本にいた時の幼馴染である。

そんなアンナには、イタチを産んで2、3ヶ月たったあたりからずっと気になっていた事があった。まだ生まれて1年も経たない息子の目つきが、どうにも赤ん坊のそれと

は思えないのだ。

初めての子育てなので確信は持てないが、息子であるイタチにはしつかりとした意思があるようにしか見えない。

しかも…

ベッドに横たわる息子は、目を瞑り両手を合わせ指を絡めていた。

(よくこんなポーズをとっているのを見かけるけど、一体何をしているのかしら?)

正直意味が分からない。しかし何か明確な意図を持って行っている気がする。

普通ならば不気味に思うものなのだろうが、

(もしかしてイタチってば、物凄い天才なんじゃないのかしら?)

アンナはお気楽であった。

そんなアンナに、後ろにいる夫から声がかかる。

「イスラエルがイラクの原発を空爆だつてよ。なんとも嫌な情勢だなあ」

ニヤニヤしていたアンナは新聞を読んでいる夫に声をかけられた。

「あら、随分と物騒なニュースねえ。明日はイタチの初めての誕生日だし、ハッピーなニュースはないのかしら?」

正直マグルの世界情勢に興味はないが、やはり殺し合いというものは気分が悪くなる。

「そう言えばさつき電話があつて、義母さん達、昼過ぎにはロンドン来れるつてさ」
久しぶりの両親の訪問というニュースにアンナの気分は盛り上がった。

「わあ！それはナイスなニュースね！」

「イタチの幼稚園の話、明日話してみようね」

「何度も言うけど、ママはイタチを日本の幼稚園に入園させる事に反対しないと思うわよ！むしろ魔法省が私の退職を渋る可能性の方が圧倒的に高いわ！」

「まあ僕もそう思うけど、やっぱりロンドンで暮らしている今より会いづらくなるだろうし、ちゃんと説明しておいた方がいいだろう」

「それもそうね。ああ明日のイタチバースデーパーティーが楽しみだわあ！」

アンナは優秀な闇祓いでありずっと闇の帝王を許せないと考えていたが、イタチが生まれてからは考え方が少し変わった。

今や彼女にとつて息子以上にプライオリティの高い事柄は存在しない。無責任と思われるかもしれないが、第二の故郷である日本に移住することに決めたのだ。

闇の帝王の力は今、恐ろしいほど強くなっている。両親の許可をもらえたらすぐにでも来日したいと考えていた。

1981年6月8日

ロンドン郊外にある内葉家、幸せそうな話し声は夜中まで響いていた。

1981年6月9日

1981年6月7日

イラク上空。カール・マダックス少尉は覚悟を決められず顔を歪めていた。

俺は軍人だ。人を殺す覚悟も恨まれて殺される覚悟も出来ている。

(しかし、これは…)

彼の眼下にはフランスの技術協力によって完成間近の原子力発電所が広がっている。彼の任務はこの原発を空爆することだ。まだ未稼働という情報ではあるが、もし放射性物質が垂れ流しになれば、俺自身の手でヒロシマやナガサキのような悲劇を引き起こす事になる。

いや、もう俺は十分過ぎる程他国に空爆を行っている。

既に殺した人間の数も2桁じゃ収まらない。

今更何を迷う。イスラエルやユダヤの為だなんて自分の行動に理由を付けて誤魔化すつもりもない。

(怨むのならば、俺を怨んでくれ！)

マダックス少尉は、涙を流しながら発射ボタンに手をかけた。

1981年6月9日

マリオ・ボツシはロンドン郊外の住宅街を歩いていた。

マリオは元カモツラ（イタリアのマフィアの通称）である。

ナポリでそれなりの勢力を誇るカモツラに所属し、スナツフムービーを撮るための子供の人攫いを行っていた。

スナツフムービーとは、子供を残酷に傷つける様子を撮影した映像の事だ。

まだ年端もいかない子供を攫い、麻薬を打ち、正常な判断が出来なくなった子供の腕を切り刻み、腹にナイフを突き刺し、暴行する。

その子供の命が尽きるまで撮影は続き、正常な人間なら吐き気を催すそのムービーは腐った性癖の金持ちが高額で買い取る。

元々裏路地のチンピラだったマリオは特に嫌悪感も感じることなく子供達を攫い続けていたのだが、妻に出会って愛を知り、子供が産まれたあたりから、スナツフムービーを許せない物だと思ふようになっていった。

その後マリオは組織を裏切り、五共和国派のテロリストに武器援助している証拠を持ってイタリア軍警察に駆け込み、家族ごとイギリスに亡命する事に成功した。

だが、カモツラという組織はそんなに甘い集団ではない。愛すべき妻も子供も組織の

残党に殺されてしまった。

もはや理想も目的も無く、マリオはロンドン郊外を煙草を吸いながらトボトボと歩いていた。

彼がこの道を歩いていたのは、いや、その異変に気付いたのは神様のイタズラだったのか、マリオの存在がその悲劇の結末を大きく変えることとなる。

同日

内葉家ではささやかなパーティーが開かれていた。

(この世界はどうかやら相当平和なようだ)

イタチがこの世界に産まれてから1年、イタチの意識が覚醒してから約1年。

祖父母がこの家に来るのは初めてではないが、両親も含めて全員がここまで満面の笑顔なのは初めてだ。

テーブルの上にはケーキと豪華な料理が並べられ、囲む大人たちの話題は尽きない。

どうやら自分を含めた3人の家族は、日本という国の遠野という地に移り住むらしい。まあどこにしようがもう少し成長しない限りこの体ではなにもできないが…。

イタチがチャクラを練ることが出来ない理由の一つ。赤ん坊であるイタチの体には

身体エネルギーが圧倒的に足りていないのだ。さらにスタミナもない彼の体では、仮にチャクラを練ることができてもすぐにばてて眠ってしまおうだろう。

そんなことを考えていたイタチは家の外からもれる殺気に気が付く。

（この世界は平和だと思つたが…撤回しよう。どうにも平和ではなさそうだ）

イタチの次に異変に気付いたのはアンナとその母であった。

（明確な殺意を含んだ複数の気配が家を囲んでいる？）

外の気配に気付いたアンナは家族に声をかける。

「アナタ！イタチを連れて家を出て沢山の人がいる所まで走って！！父さんは私の後ろに

！母さん、杖は？」

「もちろん準備済みよ」

急に臨戦態勢に入った妻に夫は、

「ち、ちよつと待つてくれ！一体何が…」

説明を求めようとしたが、アンナの切羽詰まった目を見て、

「分かった。くれぐれも無理はしないでくれよ」

言われた通りに動くことを選択した。

「さあ、ちよつとお外まで行くよイタチ。義父さんも気を付け…」

イタチを抱えた父が振り返って見たものは、緑色の光を当てられた義父の姿だった。

その男は正にスリザリンという寮に相応しい人間だった。

古くから続く純血の家柄。行き過ぎた純血主義。闇の魔術への傾倒。目的の為なら手段を選ばない冷血さ。

ホグワーツを卒業すると、彼は父に言われるまま魔法省の闇祓いとなった。

死喰い人を必要以上に傷付けるその手法は、仲間達にすら恐れられたが、彼はその実力でのし上がっていった。

例のあの人がどんどん力をつけると、闇祓いの人材不足問題が表面化。

今まで闇祓いは基本的に純血によつて組織されていたのだが、アラスター・ムーディの「実力があるのであれば純血でなくとも構わん」という鶴の一声で純血以外からも闇祓いを探すことになった。

混血であるアンナ・内葉はその第1号である。

純血主義の男は大反対をしたが、アンナの実力が認められ、彼の言葉に耳を貸す人間はいなくなった。

男はまるでストレスを発散するように死喰い人を攻撃するようになる。

そんな折、男に例のあの人と接触してきた。

決闘に敗れた男は死を覚悟するが、そんな彼に闇の帝王は意外な言葉をかける。

「貴様の事はよく知っている。」

闇の帝王は男を殺すことはせずに、静かに男に語りかける。彼の話した純血主義やその思想は、よくよく聞いてみると自分のそれに近かった。

「これは契約だ。貴様の仲間である混血の女の居場所を言うのだ。我が従順なるしもべ達が殺してやろう。それ以降の接触はしない。もちろん前に立ちはだかる時は死の呪文が貴様を襲う事になるが……」

闇の帝王がなぜ自分を殺さないのかは疑問だったが、その提案は彼にとって魅力的な内容だった。

確かにあの女はそれなりの實力を持つてはいるが、確か子供を産んで育児休暇中だったはずだ。家族を守りながらではまともに戦う事も出来ないだろう。

もちろんヴォルデモートの提案は闇祓いの一員として、了承できる内容ではないが、今の彼は冷静ではなかった。

死力を尽くした決闘に負け、断れば恐らく殺される事は目に見えているし、自分に近い思想を持つ闇の帝王のカリスマ性を間近で感じてしまったのだ。

考えてみれば、闇祓いになったのも父に言われたからであって、本気でなりたかった訳ではなかった気がする。

自分自身に言い訳を重ねて、

男は、

闇の帝王に首を垂れた。

内葉家への襲撃は、1番油断しているであろうあの女の子供一歳の誕生日、6月9日に決まった。

ヴォルデモートはほくそ笑む。

予言の子の襲撃前に厄介な闇祓いを2人も無効化できるのだ。そう、何か大きな「想定外」がない限り。

1981年6月9日 ②

内葉家の風呂場は、平均的なイギリスのそれよりも広い。

湯船に浸からない入浴などありえないと日本人であるイタチの祖父が主張した結果、巨大な浴槽が風呂場に取り付けられることとなり、結果一般的なイギリスの風呂場とは比べ物にならない大きさになった。

イタチの父も日本人であり、渡英した際は大きな浴槽を非常にありがたがった。彼の入浴に対するこだわりは義父のそれと同じでありシャワーで済ませるなんてありえなかったからだ。

そんなイタチの父は今、息子を腕の中に抱え一目散にその風呂場を目指していた。

マグルである自分に詳しいことはわからないが、アンナはマグルで言うところの警察官や軍隊のような組織に属していると言っていた。

魔法界では人殺しを何とも思わない連中の勢力がとて強く、自分と関わるのは危険だからと結婚はおろか付き合うことすら長年断られていた事を思い出す。

恐らく今我々を襲っているのはその危険な連中だ。警察官のような組織の家を襲撃するなんてはつきり言つて半端な奴らではないだろう。

玄関と裏口は塞がれているか奴らの仲間待ち伏せされているとみて間違いない。

我が家の風呂場には大きな窓があり、窓の外の格子は先日アンナが掃除中壊してしまつたため今なら簡単に外すことができる。

(それに、いざとなれば…)

リビングの方から「家族も皆殺しだ！追いかける！」という怒鳴り声が聞こえる。

(くそつ、風呂場は目の前だ！間に合つてくれ!!)

風呂場のドアを開け走りこみ、窓を開け格子を思いつきり押し壊した瞬間、後ろから声が聞こえた。

「ロコモーター モルティス！」

呪文の詠唱と同時にイタチの父の両足がくっついてしまい、その場に倒れこんでしまう。両足がくっつくという普通では考えられない状態に追い込まれたイタチの父は起き上がることもすらできない。

満足に動くことのできないイタチの父に男は声をかける。

「フフ、玄関は監視されているだろうから風呂場の窓から逃げようとしたつてか。確かに風呂場の窓は逃走経路として想定していなかった。マグルのくせに良い読みじゃないか。…だが」

男はイタチの父の足に目を向け、

「足縛りの呪いだ、もう足は満足に動くまい。死の呪いですぐに殺しても良かったんだがな。俺は人間が苦しんで死ぬのを見るのが好きなんだ」

ニヤリと笑つて、地面に落とさないように腕に抱えたイタチを取り上げた。

「貴様！何をするつもりだ！」

「フフ、何をするかだつて？そんなことは決まっているじゃないかミスターウチハ。愚かなるマグルの男よ」

男は狂つた笑顔のままイタチの父の顔を蹴り飛ばす。

「動けないお前の目の前で大事な子供を殺してやろう！」

「なんだと！おい、やめろ！」

必死に起き上がろうとジタバタしているイタチの父を一瞥し、男はイタチに杖の先を向け呪文を唱える。

マリオは背後からの大きな音に驚いて唾えていた煙草を落としてしまった。

「あーあ勿体ねえ。何だつてんだ」

落ちた煙草を踏みつけ音のあつた方に振り向くと、

「何だありや。窓の格子か？」

イタチの父が外した窓の格子が見えた。さらに内側からは男同士の言い争う声が聞こえてくる。よく聞き取れなかったが「子供を殺す」という言葉だけはマリオの耳にもはつきりと届いた。

「オイオイ、俺の目の前で子供を殺すだあ？そいつは聞き捨てならねーなあ」

かつて数多の子供を死に追いやった元カモツラは今度は子供を救うため、内葉家の風呂場に足を向ける。

死喰い人を内葉家まで案内した闇祓いは今まで自分は大きな勘違いをしていたということに今更気付いていた。

ホグワーツ在学中から闇祓いとして働いている現在まで、周りは自分のことを冷酷で残酷な男だと評した。自分でもそう思っていたし死喰い人との戦いの中でも自分が冷酷な人間であることという事に疑問を抱くことはなかった。

しかしそれは愚かな勘違いだったのだ。あるいは自惚れだったとも言えるかもしれない。

彼の目の前の光景は、正に冷酷であり残酷であり、…地獄であった。

確かに自分は根っからの純血主義で、マグルの血筋や混血を穢れたものとして見ていたが、それでもアンナ・内葉の実力と精神力自体は認めていた。

アンナは純血以外の闇祓いをありえないとする闇祓い局の雰囲気を実力で変え、その愛嬌で仲間たちにもすぐに溶け込んだ。

その上彼女は非常に上品で理知的なのだ。ものの数ヶ月で闇祓いたちは彼女に夢中になった。あろうことかアンナを姫と称え彼女を守るためなら死んでも良いと言い出す阿呆もいた。結婚したと聞いた日は、闇祓いたちの嫉妬で局内の雰囲気は過去最悪になったりもしたらしい。

彼はそんな彼女をうつつとうしく思っただけだが、確かに他の闇祓いが言うように彼女が死喰い人負ける姿も悪に屈する姿も想像できなかった。

それなのに

(なんとということだ…)

彼の眼前にはそのありえない光景が広がっていた。

「ぎゃははは……こりゃあ良い！闇祓いのお姫様がこのありさまだぜ」

アンナは、

リビングの椅子に座り、下品な声で笑う醜い死喰い人の男の前に跪き、

実の両親の死体の横で、

その男の泥に汚れた靴を必死に舐めまわしていた。

「おい、何とか言ってみろよこの糞アマア」

暴言を吐きながら、男はアンナの顔を蹴り飛ばす。

絶対に悪に屈さないはずの闇祓いの姫から発せられた言葉は、アンナを知る者からしたら想像もできない言葉だった。

「も、申し訳ありませんでした。私は自分の愚かさも知らず、闇の帝王様に逆らっております。本当にごめんなさい……ごめんなさい……」

男は、頭を地面に擦り付け必死にあやまるアンナをニヤニヤした顔で眺め、足をアンナの顔の前に差し出す。

「お姫様よお、ロングボトムの夫婦はさつさと精神崩壊しやがったが最後まで俺たちには屈しなかつたんだぜ。やっぱり混血は何もかもが中途半端だったか？」

ロングボトム家の名を出されアンナの眼に微かだが意志の光が戻る。靴を舐めようとしていた舌をひっこめ男を睨む。

「おっと、また反抗的な目つきになつたな。クルーシオ」

「いやあああああああ！」

もう何度目になるかもわからない磔の呪文にアンナは床をのたうち回る。

「お姫様、反抗的な目をしたら磔の呪文だつて何回もいったでしようが。馬鹿だねえ。さて磔の呪文の次はまた服従の呪文だよ。もう何回繰り返したかなあ」

服従の呪文をかけようと杖を向けると、屋敷を探索していた男が慌ててリビングに駆け込んできた。

「おい、風呂場に来てくれ！ゲイリーが死んでる」

息も絶え絶えに伝える男に、アンナに服従の呪文をかけようとしていた男は、アンナの顔を踏みつけ、

「おいおい、こいつの旦那はマグルだろ？ゲイリーがマグルに殺されたつて言うのか？」

「いや、そいつも死んでいた。とにかく来てくれ」

「…分かつた。おいテメーら、風呂場に行くぞ。」

男はアンナの顔を踏みつけたまま立ち上がり、

「ああ、忘れてたよ。」

まるで部屋の電気を消し忘れたぐらいの気軽さで、

「アバダ・ケダブラ」

「アバダ・ケダブラ」

アンナと、内葉家まで案内してきた闇祓いの男をあっけなく殺した。

とてつもない内葉家の惨劇だが、このような悲劇は10月31日までの魔法界での日常であつた…。

イタチに杖を向け死の呪いをかけようとしたゲイリーだが、呪文を唱えることはできなかつた。

「ぐっ、き…貴様…！ガハア」

ゲイリーの背にはイタチの父が覆いかぶさり、背中にナイフを突き立てていた。

「お前らの世界の事はよく知らないがよ。これはアンナが護身用にくれた魔法のナイフだ。保護呪文とやらも関係なく突き刺せるらしいぜ。足をくつつけたぐらいで俺から目を離すんじゃないやなかつたな！子供を守る親なめんじゃねー！イタチは絶対に殺させ…ぐはっ」

ゲイリーは最後まで聞かずにイタチの父を蹴り飛ばした。

足縛りの呪いで踏ん張り過ぎがきかなかつたためナイフを強く突き刺すことができず、ゲイリーに致命傷を与えるには至らなかつたようだ。イタチの父を蹴り飛ばしたゲイリーは、背中のナイフを抜き、イタチと一緒に窓から外に放り投げた。

「くそつたれ、もう遊びは無しだ。今すぐぶつ殺してやる！アバダ・ケダブラー！」

緑の閃光が真つ直ぐイタチの父を貫いた。

イタチの父の死を確認したゲイリーは窓の外に目を向ける。

「よし、間違いなく死んでいるな。……ぐっ、痛え。だが回復の前にあの赤ん坊も殺さね

えと……」

窓から顔を出してイタチを探そうとしたゲイリーだが、ゲイリーが窓から顔を出した瞬間、彼の喉に魔法のナイフが突き刺さった。

「……は？」

「さすが魔法のナイフ様だ。カモツラのナイフより切れ味が良いじゃねーか」

イタチを受け止め、ナイフを拾ったマリオがゲイリーの喉に拾ったナイフを突き刺したのだ。突き刺されたゲイリーは勿論即死である。

ナイフをゲイリーの首から抜いたマリオは、ゲイリーの洋服でナイフの刃の血を拭拭い取る。

マリオが、さてこれからどうしようかと考えていると家の奥から足音が聞こえてきた。マリオは思考を中断し、近くの木の陰に隠れる。

足音の主は風呂場に入ってくると驚いた声を出し、「くそつ、お前が殺されてどうする！」と言いながらもまた家の奥に走って行った。

今の男は恐らくこの子の敵で、確実に仲間を連れてくる。そう判断したマリオは赤ん坊を連れて逃げることを選択した。

真つ暗の通りを全力で駆け抜けながらマリオは考える。

(それにしても、一家は(多分)惨殺され逃げ延びたのは恐らくこの赤ん坊だけ。

しかしこのガキを殺した男、杖みたいな物を使って奇妙な光を出していたな。あの緑の光に当たると死ぬというのは俄かには信じられないが「子供は殺させない」と騒いでいた男が光を当てられただけで何も言わなくなつて、光を当てた男は死亡を確認していた。こいつはこのガキを警察に連れて行つてももしかしたら安全とは言えないんじゃないのか……?)

「くそつ面倒な事になりやがった。」

(何にも知らずに眠りこげやがってこのガキ……)

マリオは初めて助けた赤ん坊に目を向けた。近づいてきた街灯が丁度イタチの顔を

照らす。

「…オイオイ、お前まさか…」

しつかりとした意志を持っているとしか思えないイタチの眼がマリオを見つめ返す。

「…あの騒ぎの中ずつと起きてたつての…」

マリオの全身に鳥肌が立つ。

（ありえねえだろオイ…。1歳かそこらのガキだぞ。あの状況で泣きもせず黙ってるハズがねえ…。何なんだこいつは…）

1981年6月9日

イタチは家族を失った。

戦争編

1985年7月

うだるような日差しが差し込む中、上下左右フェイントを織り交ぜた多彩な攻撃がイタチを襲う。一撃一撃が相当な重さであり、掠っただけでも普通の人間ではただでは済まない事その風圧が物語っている。しかしただの一発もイタチに入れることはできない。イタチはすべての攻撃を見切り余裕を持って躲していた。

「なあ、ボスってボクシングのミドル級元学生チャンプなんだろ？あのがキ一体何者だよ」

初めてイタチの戦いを見る男にマリオは簡潔に答える。

「簡単な話だ。ミドル級の元学生チャンピオンよりイタチの方が強いつてだけだよ」

マリオの身も蓋も無い説明に男は言葉を詰まらせる。当然だ。ボクシングの学生チャンピオンに敵う大人ですらほとんどのいなのに、ボスと戦っているのはまだ5歳の子供なのだ。常識的に考えて身長が185センチある大人と120センチ程しかない子供が殴り合いをして勝負になるはずもない。

だがイタチは普通の人間ではなかった。イタチは右ストレートのため踏み込もうと

したボスの左足を払い、バランスを崩したボスの顔に掌底をたたきこんだ。そのまま後方に数メートル飛ばされるボス。2人を中心に円を作っていた30人程の男たちが盛り上がる。

「ボスー！なんて様だ！」

「賭けになんねーぞボス」

「イタチイ！相変わらず強すぎだろ」

好き勝手に暴言を吐く外野に苦笑しながらボスが立ち上がる。

「とりあえずここまでか？カール」

「そうだなイタチ。しかし相変わらずの化け物っぷりだな。まるで歯が立たん」

賭けに負けた数人の男に文句を言われているこの組織のボス、カール・マダックス元少尉から離れ、イタチはマリオの所へ向かう。

「マリオ、俺は川で水を浴びてから帰る。先に戻っている」

「わかった。まあ俺もボスに賭けた阿呆どもから金を徴収してから帰らないとだがな」
ニヤリと笑うマリオに飽きた顔をしながらイタチは川に向かおうとするが、

「おい、イタチって言ったかお前」

先ほどまで言葉を詰まらせていた男に話しかけられた。

「イタチ、はつきり言ってお前の強さは異常だ。お前は何者なんだ？」

イタチは黙って男を見つめていたが、しばらくして口を開いた。

「…人間は自分の知識や常識に縛られて生きています。主観的な常識なんて曖昧なものだ。俺より強い子供だっていくらでもいるかもしれない。そうは思わないか？」

そんな子供いいねえよ！と心の中で盛大に突っ込むマリオをよそに男はイタチに言葉を捻り出す。

「お前まさか…ファロットの一族か？」

男の口からファロットの名が出た途端、周囲が静まり返る。

「おいおいそりや都市伝説の…」

マリオは否定しようとしたが、周りの男たちが集まってきて言葉をさえぎられてしま
う。

「イタチ！お前ファロットの一族だったのか？」

「ファロットってあのファロットか!？」

「そりや強い訳だ！」

「いや、ファロットって伝説だろ？ 実在はしないって話だぜ」

好き勝手に囃し立てる周囲に疑問を抱いた顔でイタチは質問する。

「ファロットの一族というのは何だ？」

マリオは両手をパンパンと叩き周りを黙らせる。

「いいかイタチ、ファロットってのは実在するかも分からねえ都市伝説みたいなもんだ。噂だと暗殺を基本とした殺し屋の一族らしい。銃の腕は一流で1000ヤード先からターゲットの目を打ち抜くことが出来て、中国武術の達人30人を一瞬で殺す体術の才能を持ち、戦争では一個小隊を1時間で皆殺しにできるんだとさ。はつきり言つて眉唾物だ」

噂が独り歩きした都市伝説だとマリオは言うが、周りの男たちはそれに反論する。

「てめえイタリア人のくせにロマンがねえぞマリオ」

「いやあれは伝説だぞ」

「ケネディ暗殺はファロットの仕業らしいぜ！」

「マルコムXの事件も裏で糸を引いていたとか……！」

「いややつぱり存在しねえだろ。ありえねえよ」

侃々諤々。それぞれが好き勝手にしゃべり収拾がつかなくなった時、

「いや、ファロットの一族は実在するぞ」

カールが輪に入ってきた。

「ボスー」「本当かよ!？」

普段冗談を言わないボスの爆弾発言に男たちは大いに驚いた。

「俺は以前アメリカ軍にいたからな。詳しいことは知らないがアメリカとファロットに

繋がりがあることは事実だ。強さの噂は所詮噂だか、奴らは実際恐ろしく強いそうだが、敵国の要人暗殺や戦争にかなり金を使って利用しているらしい。実際に会ったことのある上司は、奴らは魔法だが魔術だかを使えると言っていたが、まあそれは眉唾だろう」「マジかよ……」

「実在しないと思いついていたマリオは衝撃の事実にも固まっていたが、我に返り不安を口にします。」

「なあボス、この戦争アメリカの動向も怪しくなってきたぜ……。もしかして俺たちにファロットを差し向けられるなんてことは……」

周囲の男たちもつばを飲み込むが、カールは涼しい顔をして

「ファロットへの依頼額は安くて数十万ドル単位だ。我々『影』を殺すためにそこまですることはまず無い。それにファロットは依頼は受けてもどこにも属さない。ソ連でも中国でも、それこそ俺たちが雇うことだってできる。まあ連絡手段があればだが。實際影にファロットを送り込まれたら一晩で皆殺しだろう。奴らの依頼達成率はほぼ100パーセントだからな。」

カールの言葉を聞いたマリオはほっと胸をなでおろす。

「そりゃ良かった。しかしほぼってことはファロットも失敗することがあるのか」

「ああ。ファロットへの依頼は全て前金で失敗した時だけ依頼金が返ってくるのだが、

一度だけ軍に返金されたことがあったそうだ」

「はっ！ファロットの一族とはいえ所詮は人間だな。なんで失敗したんだ？」

周囲の男の一人が野次った。

「ファロットが失敗するのは、相手もファロットを雇った時だけだ。ファロットはすべての依頼を断らない。お互いがファロットを雇った時はファロット同士で殺し合いになる。その時は我々が雇ったファロットが殺され依頼は失敗に終わった」

一瞬の静寂。

「狂ってるぜ……」

誰かがつぶやいた一言は全員の総意だった。

「それでイタチ、お前はファロットの一族なのか？」

ニヤニヤと笑ったカールがイタチに問いかける。

「分かっていて聞くなカール。俺のファミリーネームは『うちは』だ。ファロットとやらの一族ではない。俺はもう行く」

そのままイタチは川の方へ立ち去って行った。

「なあボス、ファロットの一族はイタチよりも強いのかね」

マリオがカールに尋ねる。

「何とも言えんな。俺も実際にファロットと会ったことは無いしな。そしてイタチの底

も見たことがない」

「次の戦闘は一週間後だったよな。イタチも前線に送るべきじゃないか？ガキとはいえ影の誰よりも銃の扱いが上手くて強い」

「いや、子供にそこまでの負担はかけられんよ。我々がいない間にアジトにファロットが来るとも限らんしな」

ウインクをするとカールも部屋に戻って行った。

1985年7月

イタチはイランの傭兵部隊『影』にいた。

内葉家の悲劇の一件以降、マリオは警察には行かずにフランス経由でイタリアに密入国した。カモツラ時代の伝手を使い、人身売買のルートでイラン・イラク戦争のための人材斡旋組織までたどり着いた。

マリオは、イタチを傭兵部隊に売って自分はまたイギリスまで戻ろうと思っていたが、傭兵部隊『影』のボスであるカール・マダックスの考え方に共感し自らも『影』に入ることを決意したのだ。

『影』に所属して3年とちよつと。イタチが急にしゃべりだしたり、子供とは思えない戦闘能力を発揮したりと様々なことがあったがそれはまた別の話である。

1985年4月某日

「依頼だ……」

眩くように、しかし良く通る声で男は言った。彼の名はリチャード・ファロット。ファロットの一族の長である。年は50歳程だろうか。引き締まった巨体に太い腕、左目が傷ついていて隻眼となっているが右目の眼光は鋭く一般人がその目で睨まれれば恐怖に体が竦んでしまうだろう。

王者の風格を纏ったリチャードは前に並んだ3人に指示を出す。

「ターゲットは『影』という名の傭兵部隊。100名ほどの組織で今のイランとイラクの戦争で活躍している。期限は今年中だ。今年中にアジトを見つけ出し皆殺しにするように。質問は？」

3人は沈黙を守ったままである。

「無ければ資料を受け取り行動開始。以上。下がれ」

資料を受け取った3人は音もなくまるで忍びのように部屋から消えた。

「レティシアの様子は？」

リチャードの言葉に、資料を配り終えた女性が振り向く。

「本日の修行は終わっております」

「ではレテイシアをここにへ」

「はっ」

だれもいなくなった部屋の中でリチャードはニヤリと微笑んだ。

リチャードから指示を受けた3人はファロットの屋敷の長い廊下を並んで歩いていた。

「しかし……たかが1000人の傭兵殺しにファロット3人つて多すぎやしないか？1人でも十分こなせる任務だ」

一番背の高くヒョロつとした金髪の男、パトリック・ファロットが資料を左手ではたきながら2人に問いかける。

『『イギリスの悪魔』の一件からリチャード様はだいぶ慎重になった。もうファロットとして失敗はできないのだろう』

資料から目を離さないまま、ファロットには珍しい女性、リンダ・ファロットが応える。

『『イギリスの悪魔』か。あれは久しぶりの化け物だった。心臓を抉っても死なないんだからな。イギリスの魔法はやっぱり進んでるぜ。不死の魔法なんてファロットには存在しない』

「不死の魔法を使えるのは恐らく悪魔だけだろう。杖を使わなければ発動しない魔法などに何の意味がある。暗殺という一点においてファロットの術を超えるものはないだろう」

「だが、悪魔を殺せなかったのは事実だ。ファロット700年の歴史の中で、相手側にファロットが雇われていないのに暗殺を失敗したのは初めてだったらしいからな。まあ慎重になるのも無理はないか……」

やれやれとパトリックが両腕を上げる。

「我々は 与えられた任務をこなす それだけだ」

それまで沈黙を守っていた男。キース・ファロットが口を開いた。

「違いねえ。ま、とりあえずそいつらの根城を見つけ出す所からだな」

パトリックは獰猛な笑みを浮かべた。

「なあボス、ファロットの一族はイタチよりも強いのかね」

「何とも言えんな。俺も実際にファロットと会ったことは無いしな。そしてイタチの底も見たことがない」

(…体術だけならファロットの方が上だな。しかしあのイタチって子供は少し不可解だ。…どう見てもあれ、魔力を纏っていやがる)

カールとマリオの会話を聞きながらパトリックはイタチの分析をしていた。

イタチとカールの手合せ中マリオに話しかけ、手合せ後にイタチに話しかけた男はパトリック・ファロットその人であった。

（杖を使わずに魔法を利用できる人間はファロットの一族だけのはずだ。本当に何者だあのがき…）

面倒な任務になりそうだとパトリックはため息をついた。

（次の戦闘は一週間後…ね）

パトリックはイタチとは逆方向の森に向かって行った。

森の中に入り紙にメモを書き口笛を吹く。するとパトリックの下に鷹が舞い降りてきた。

「リンダへのラブレターだ。ちゃんと届けてくれよ」

鷹の背を撫でると、リンダ（とキース）にラブレターを届けるため鷹は力強く羽ばたいた。

「じゃあ行ってくる。クリス、アリー、イタチと一緒にいい子にしてるんだよ」

「うん、気を付けてね。パパ！」

「いつてらっしゃい！」

カール・マダックスの双子の子供、クリストファー・マダックスとアリス・マダックスが戦闘に向かうカールたちを見送る。

「イタチ、すまないが二人を頼んだ」

「分っている」

イタチの応えに頷き、カールと80人の傭兵たちが戦闘に向かった。

カール達の姿が見えなくなるとクリスとアリスが騒ぎ出す。

「イタチ！ しゅぎよーだ！」

「しゅぎよー！ しゅぎよー！」

これから数週間、長ければ数か月、この3歳年上の子供たちの面倒を見なければならぬと思うとイタチは憂鬱だった。

イタチはふと後方からの視線を感じ振り向くが、視線の先に怪しい人物は見当たらない。
い。

「…」

アジトから2キロ先の森の中。仕留めた蛇を焼いて食べようとしていたリンダの下へパトリックとキースが音もなく戻ってきた。

「首尾は？」

尋ねるリンダに、

「問題 ない」

「いや問題あるだろ。キースお前昼間イタチに視線送りやがって。あれほどやめろと言ったのによお」

言い争うパトリックとキース。言い争いながらパトリックはリンダ焼いた蛇にカレー粉をまぶして食らいつく。

ため息をつきリンダはもう一度訪ねる。

「作戦はどうだと聞いているんだ」

「作戦は問題ない。井戸に遅行性の毒を入れ、全員がその井戸水で作った食事を食べるのも確認した。俺たちが奴らのアジトに到着する頃合いに間違いない死ぬだろう。ただ…」

「またイタチってガキか…」

またそれか。とリンダはパトリックを睨む。

「イタチ も 食事を 食べた」

「だったら問題ないだろうパトリック」

「まあ、そうなんだけどな…。俺の暗殺者としての勘だ。あいつは相当なタマだぜ」

「たかが5歳のガキだろう…。気にしすぎじゃ…」

「お前たちもレティシアの修行を見ただろう。5歳だろうがガキだろうが警戒するに越したことはない」

リンダの言葉を遮るパトリック。パトリックの眼に油断は微塵もない。

「まあ毒で死んでいれば当初の作戦通り全員の死亡を確認して終いだ。だか仮にイタチあるいは誰か生き残りがいた場合は最優先で確実に殺す。その後死体を処理してアジトに爆発物のトラップを仕掛ける。帰ってきた連中を爆死させ、運よく逃れた兵士たちを俺たちで殺す。以上がシンブルな今回の作戦の中身だ。質問は？」

リンダとキースが無言で頷く。

「ではファロットの誇りを持って、愚かなる敵に突然の死を……」

パトリックが宣言すると、3人は夜の闇と同化して走り出す。

恐ろしいスピードで駆ける3人だったが、アジトまで500メートルといったところで足が止まる。

(やはりこうなったか……)

ある意味パトリックの予想通り、3人の前に立ちはだかつたのはうちはイタチだった。

(この男……先日カールとの手合せの後話しかけてきた奴か……)

特に構えもしないでいるイタチに、相手の一人が持っている銃から銃弾が撃ち込まれ

る。

イタチは全く慌てずにナイフでその銃弾を弾く。

銃を撃った本人であるリンダは驚いていた。ファロットも銃弾をよけたり弾いたりすることは出来るが、5歳の頃から出来るわけではない。

ファロットでは18歳までに殺しの技術と思想を叩きこまれる。銃弾を弾けるようになるのは速くて15歳ぐらいである。

(やはりパトリックが正しかった…。ナメてるとヤバい…。本気で殺す！)

リンダは銃をホルスターに戻し、短刀を右手に構え、イタチに向かって突進した。

イタチまで後数メートルというところでパトリックの口笛が響く。

「…っ」

口笛が聞こえると同時にリンダは攻撃を中断し後ろに跳躍した。

パトリックは短刀を抜刀しながらもう一度口笛を吹く。するとキースも片手に短刀を構え、3人はイタチを取り囲んだ。

(やはり素人ではないな…。それに…)

一人で攻撃しようとしていた女を口笛で止め、フォーメーションを組んで攻撃して行く手際にイタチは警戒を強める。さらに…

(チャクラ刀…。全員チャクラを使えるのか…?)

恐らくリーダーであろう口笛の男パトリックに注意を向けた瞬間、死角にいたキースがイタチに銃弾を撃ち込む。

それを避け、イタチがキースに視線を向けた瞬間、パトリックとリンダがイタチに迫る。

パトリックの横なぎの一閃を避けリンダの攻撃をナイフで受ける。瞬間、背後からキースの殺気を感じリンダを後ろに投げ飛ばす。

パトリックの後ろ回し蹴りを避け、短刀の追撃をナイフで受ける。パトリックはニヤリと笑い口に咥えた紐を引く。

(仕込みの銃か……)

パトリックの腰のあたりからの銃弾を避けると、キースの上からの一閃とリンダの横からの一閃がイタチに同時に襲いかかる。

イタチはキースの手首を蹴り上げ攻撃を止めながらリンダの右腕にナイフを突き刺した。

「ぐうっ……」

リンダは激痛に顔を少し歪めたがそのまま短刀を持った右腕を振りぬく。

その短刀はイタチの足を少しだけ切り裂いた。

仕切り直しとばかりに飛びのいて距離を取るイタチとファロットたち。

イタチは少し切られた自分の足を無言で見つめると、「ボン」という音とともに煙と
なつて姿を消した。

イタチとフアロツトたちの第一戦は、お互い底を見せず、ただの一言も言葉を交わさ
ぬまま終了となつた。

1985年7月8日

(どういふことだ…)

アジトの前で再び相まみえることとなったイタチとファロット達。しかし両方とも相手を警戒をしているのか動きは止まっている。

(先ほどの戦闘だと賊は3人いたはずだが、2人しかいないな…。俺の感知できない遠方からライフルで狙ってくるつもりか、腕の傷のために戦線を離脱したか…)

リンダがいないうちにイタチは疑問を抱くが表情に変化は一切出ていない。

対するパトリックとキースは先ほど以上に警戒してイタチを睨みつけていた。

(リンダがいないうちに動揺した様子は見られない。そして足の傷が無くなっている…。このガキが魔力を纏っていることから考えれば、そう深くない傷だ。魔法を使えば回復することもできるかもしれないが…ズボンの傷も無くなっているというのはどういうカラクリだ?しかもこいつの魔力…さつきより格段に多い…)

「ふっ、作戦の変更は正しかったな…」

誰にも聞こえない声で呟き、パトリックは短刀を抜刀し魔力を込める。

キースに一瞬目を合わせたパトリックはそのままイタチに恐ろしい速度で迫り短刀

を横一閃に振り抜く。バックステップで後ろに避けたイタチだったが、短刀の軌道上にあった胸のあたりの服が引き裂かれていた。

（鬼鮫が切られたアスマさんのチャクラ刀と同じだな…。）

大蛇丸が行った木の葉崩しの後、ダンゾウと相談役への警告のため木の葉隠れの里に行った時のことを思い出す。

（先の戦闘でもこいつらは忍術を使ってこなかったが、この世界にも術を使える人間がいるのか…？）

パトリックの猛攻を躲しながら少し試してみようとイタチは印を組み、パトリックがキースの前方に立った瞬間に術を放つ。

火遁—豪火球の術—

イタチの口から特大の炎の球が吹き出されファロットを襲う。

パトリックの口笛と共にファロット達は横に飛びのいて豪火球の術を避けるが、2人の額には汗が滲んでいた。

（ありえねえだろ!!何だ今の魔法は…!杖も使わず口から火を噴きやがった!）

すぐに体勢を立て直しイタチのいたあたりを睨みつけるパトリックだが、煙が晴れた時その場所にイタチの姿はなかった。

「しまじ…」

後ろを振り返った。パトリックが見たものは、背中にナイフを突き刺され地面に崩れ落ちるキースの姿だった。

キースの背中のナイフを抜き取り、イタチはパトリックを睨む。

舌打ちをして睨み返す。パトリックだが、その顔に余裕は無くなっていた。

(実際問題、こりややべえな)

パトリックは大きく後ろに飛びのき夜の闇に消える。イタチはパトリックを追おうと一歩足を踏み出すが、その足を倒れたキースが掴む。

(……こいつまだ……)

「ファロツトの……誇り……を、もって……、ぐつ、愚かなる敵につ……突然の、死を……！」

瞬間、キースはもう片方の手で腰のひもを引っ張り、自分を巻き添えにして爆発した。

「全く……まじでやばかった。あのガキと一緒に爆発に巻き込まれちまうところだったぜ……」

不可避の距離で爆発をくらったイタチを確認した。パトリックはほくそ笑んだ。

はるか後方からの爆発音を耳にとらえ、リンダは歯を軋ませた。

(この爆発……。パトリックかキースが自爆したな……)

リンダは最初のイタチとの戦いの後パトリックに言われたことを思い出す。

「リンダ、その腕であのガキとの戦闘は無理だ」

イタチが文字通り消えた後、アジトに向かおうとする2人にパトリックが待ったをかけた。

「パトリック：それはあたしを侮辱しているのか？あたしたちは刺し違えてもあのガキを殺さなきゃいけないんだ」

「いかなる 傷を負っても 任務は 継続される」

睨みつける2人に、パトリックは両腕をあげ首を振る。

「お前らよお：イタチと戦って興奮してるのは分かるが、目的を見失いかけてるぜ。」

パトリックの言葉に2人は怒りを収め怪訝な表情をした。

「どういう 意味だ？」

パトリックは指を一本立て、

「いいか？お前ら。俺たちの任務はイタチを殺すことだけじゃねえ。確かにさっきの戦闘の感じだと、恐らく俺たちでイタチを殺すことはできる。これを使えば尚更な…。だがそれには俺たちの死が高いリスクで付きまとう」

ぼんぼんと自分の腹を叩く。パトリックにリンダとキースは頷く。

「俺たちの任務は影の皆殺しだ…。やつかいなガキを1人なんとか殺せましたが全員再起不能になりましたじゃ話にならねーんだよ。そこの所をはき違えるな。これから俺

とキースでイタチを全力で殺す。リンダは今からさっきの野営ポイントに戻って待機だ。1時間たつて爆発音が聞こえなければ当初の作戦を続行。だがもし仮に俺がキースのどちらかが自爆したらファロットの屋敷に戻り報告と作戦の立て直しをしろ。質問は?」

リンダは下を向いたまま静かに回答した。

「いや、無い…」

歯を食いしばるリンダの肩に手を置き、パトリックは優しく語りかける。

「まっ、それは最悪の場合だよ。俺たちはそんなにヤワじゃない」

パトリックは気障なウイंकをして、キースと共に影のアジトへと駆けて行った。

それにしても…とリンダは走りながら考える。ファロット3人と涼しい顔をして渡り合うあの子供は何者なのだろうか。

(これは下手すると、レティシアを使うことも視野に入れないとね…)

(しかし本当に作戦を変更して良かったな…)

中腰の状態から立ち上がり、パトリックは服についた汚れをばんばんと掃う。

(この爆発で恐らくリンダは屋敷に帰っちまったが、イタチさえいなければ全ての任務

は俺一人でもこなせる。キースに掴まれた状態でファロットの自爆をくらったんだ。
(これで)

「イタチは…確実に…」

「死んだかな？」

「!!？」

背後からイタチの声が聞こえると同時に自分の腹が短刀に突き抜かれていることに
気付く。

「なぜだ…確実に死んだはず…」

血を吐きながら問うパトリックにイタチは顔色を変えずに、

「変わり身だ…」

下忍でも使える基礎忍術だとイタチはつまらなそうに応える。

振り返るパトリックの目に映ったのはイタチの冷たい瞳と、胸のあたりが少し切られ
たイタチの服だった。

「服の傷…無くなってねえじゃねえか…」

「当然だ。俺は本体だからな」

薄れゆくパトリックの目が最後に映したものは、キースの短刀を振りかぶるイタチの姿だった。

（意味わからねえよ…糞野郎…）

横たわったパトリックの横でイタチも膝をつく。イタチの息遣いは少し荒い。

（やはり5歳の体に複数の忍術は負担が大きいか…。写輪眼が開眼していればこいつらの目的や背景も知ることが出来たのだが…）

イタチはキースが死ぬ前に呟いていた言葉を思い返す。

「ファロット…か」

恐らくこいつらが先週影のメンバーの話していたファロットの一族なのだろう。下忍以下の体術しか使えないカールが格闘技のチャンピオンだったことを考えると、体術だけ見れば中忍に近いこいつらはこの世界では相当強いのもかもしれない。写輪眼も無く、体も出来上がっていない今の状態で仮に上忍レベルのファロットが現れたら…。

（少しまずいかもしれないな…）

イタチは立ち上がりアジトに向かうが、キースの自爆によってアジトの壁の一部はポロポロに崩れている。ファロットもそうだが、イタチの目下の面倒は、眠ってもらった影のメンバーにアジトの崩壊をどう説明するかなのかもしれない。

1985年8月

「ファロットが作戦の期限を延ばすように依頼してきたけど？」

アメリカ海軍のジェネラルであるレックス・ソウルは少し目を見開いて部下の報告を聴いていた。

「オイオイ、2年も延長つて、影の皆殺しになんでそんなに時間がかかるんだ」

「しかし、先方は延長するかキャンセルするかの二択だと言つていて……」

全身に冷や汗をかきながら部下は報告する。このレックスという男は、人間とは思えないほどの膂力を持つていてアイアンクローで人の顔を潰せると恐れられている海軍きつての化け物である。

「ふむ……ファロット側には延長で構わないと伝えておけ」

怪物レックスは少し考えたのち部下に延長の指示を出す。

「よ、よろしいので？」

「二度は言わん。さっさと連絡しろ」

「はっ！」

レックスに睨まれた部下は姿勢を正して返事をし、すぐに部屋から逃げ出した。

「ファロットが延長を頼んでくるとは……何かあるな……。ふむ、少し調べてみるか」

影の皆殺しを依頼した張本人。レックス・ソウルは腕を組んで計画を練り直さざるを

得なかった。

ファロットからの作戦延長願ひ。これで米国による表立つてのイランイラク戦争への介入は遅れることとなった。

1985年8月

「これだけの不測の事態が起きながらイタチ、よくぞアジトと仲間を守ってくれた。感謝する」

「かまわん。やるべきことをやっただけだ」

頭を下げるカールに対してイタチは相変わらずのポーカーフェイスだ。

「しかしまさかパトリックがファロットの一族だったとは…。本当に影がファロットに狙われているとなると、アジトの場所も変えないとな…」

「まあ変えたところですからすぐに見つかるだろうが…。カール、それとは別に少し根本的な対策をしたい」

イタチからの提案は珍しいと思ひながらカールはその内容を尋ねる。

「カール、そして俺の背後で聞き耳を立てているクリスとアリス」

イタチがクリストファーとアリスの名前をだした途端、廊下でガタンという音が聞こえた。

「この3人を、俺が鍛える」

「はっ！」

イタチの目の前と後方の廊下から、間の抜けた声が3つ揃って聞こえた。

1985年8月

薄暗いファロツトの屋敷の中、リチャードの前に立つリンダは珍しく緊張していた。イタチとの戦闘から2週間。パトリックたちからの音沙汰は無い。どのような状況の中では分からないが、死んでいるとみて間違いはないだろう。影皆殺しの作戦の立て直しとしてファロツトの長リチャードから直々に命令が下ることとなり、リンダはリチャードの前に立っていた。

「結論から言う。レテイシアを使い2年以内に影殲滅作戦を行う。パトリックとキースで敵わなかったと言う事は、我かレテイシアが出ない限り結果は変わらないだろうからな。リンダ、お前はイギリスに飛びうちはイタチの情報收拾を行え。血縁や宗教、一族の特殊技能など全てを丸裸にしろ」

「はっ！」

直立不動のままリンダは応える。

「お前もいいなレテイシア」

何気ないリチャードの言葉にリンダは飛び上がりそうになるのを必死でこらえる。

(この部屋にいるのか!?)

リチャードの前にいるときにファロットは気を抜かない。警戒心MAXでいるはずなのに、この部屋にレティシアがいることにすら気付けなかったリンダは驚愕する。

「何でもいいけどさ、何で2年も期間を取るんだ?別に今すぐでもいいんじゃない?」

いつの間にかリンダの真横にいて欠伸をしている少年レティシアは緊張感のない声でリチャードに尋ねる。

金髪の猫っ毛にパツチリとして少し釣り上った猫目の美少年。可愛らしい見た目は裏腹に、ファロットの歴史の中でも類を見ない体術の才能と底の見えない魔力の量。正に天才と呼ぶに相応しいレティシアは、ファロットが二人がかりで敵わなかったと聞いても気にも留めずにそう言い放った。

「実際、お前の力があればそのイタチという子供も簡単に殺せるだろう。だがその前に、お前に授けておきたいファロットの秘伝があるのだ」

ファロットでは18歳までに殺人術のイロハと思想を叩きこまれる。その修行を終え、一番才があるとみなされた者にのみファロットの長から直接伝えられる秘伝の技があった。

「5歳にしてファロットの修行をすべて終えたレティシア、今日からは我が直接修行を

つける。Hsiên—シアン—の修行をな…」

ファロットの天才レティシアは、イタチと直接対決する前に、ファロット最強の秘伝を身につけることとなった。

1986年8月

飛び交う怒号と銃弾をもとめせず戦場を走る2つの小さな影があった。

「瞬身の術」

兵士たちはその2人を狙い銃弾を放つが、1発として彼らに命中することはない。

「くそっ！当たらねえ！」

苛立つ男の前で高速で移動していた影の片割れが止まる。

「遅えんだよ！」

男の目の前に現れたのはまだ10歳にも満たない少年だった。無邪気な顔で笑った子供は男を殴り飛ばす。

殴られた男は5、6メートル後方に吹き飛ばされ意識を手放した。小さな体から繰り出されたとは思えないレベルのパンチに恐怖し、周りの兵士たちは一歩後ろに後ずさる。

「はっ、この戦場も楽勝だな」

自分を恐れ一歩後退した周りの兵士たちを一瞥し、少年は満足そうに腕を組む。

しかし後退した彼らも多くの修羅場をくぐった歴戦の戦士たちである。兵士の1人

が我に返り銃を構える。彼が少年の背後から引き金を引こうとしたその瞬間、後方からの手刀を受け気絶してしまった。彼に手刀を入れたのはもう一方の影である、影の正体は少年と同じぐらいの年の少女だった。

「クリス、油断しちゃダメ」

少女は、調子に乗り周りが見えなくなっていた少年を窺める。

「へっ、わりーわりー。でもよ」

本当に悪いと思っているのか、へらへらと笑いながらクリスと呼ばれた少年は少女に向かつてナイフを投げる。かなりの速さで投擲されたそのナイフは、少女を逸れ彼女に後方から襲いかかろうとした男の額に突き刺さった。

「アリス、お前も油断大敵だぜー」

ウインクするクリスに飽きた顔でため息をつくアリス。舐めた態度をとる2人に、周囲の兵士たちの怒りのボルテージが上がっていった。

「調子に乗るなよ糞ガキども…ぶっ殺せ!!」

周りの兵士たちが銃を構え引き金を引くが、2人の子供は全く焦ることなくナイフを構えた。

(…クリス達の方は問題無さそうだな)

クリス達の後方 数十メートル、自身も戦いながらイタチは二人のチャクラを感知す

る。

イタチがカール、クリス、アリスの3人にチャクラの使い方を教えてから約1年。戦闘能力が格段に上がった3人によって、影の戦績は素晴らしいものとなった。

イタチが新たに生を受けたこの世界には、アンナやその母、そしてファロット、さらにマダックスの親子など、チャクラを練る才能を持った人間が少数存在した。カール達にチャクラコントロールを徹底的に教えた結果、彼らは忍術を使えるまでに成長したのだ。そこにイタチによる体術の指導も加わり、3人は前線に送つても死ぬどころか大きな成果をあげられるようになっていた。ファロットレベルの敵が現れたら一瞬で殺されるだろうが、多少鍛えられた軍人に相対したところでさほどの危険はないのである。この戦場も影を従えたイラン側の勝利に傾きつつあった。

このまま一気に形勢を傾けようとイラン軍の士気が上がるが、突如上空に現れたヘリコプターに彼らの足が止まった。

敵味方どちらのマークも付けていないそのヘリコプターは上空数十メートルの位置でホバリングしている。突如ヘリコプターのドアが開き、一人の男が何の躊躇いもなくそこから飛び降りた。

「…人がヘリから落ちたのか？」

まるでミサイルのように空中から目の前に突っ込んできた人間にクリスは驚いた。

「自分から飛び降りたように見えたけど……」

アリスもクリスの傍らに立ち怪訝な表情を浮かべる。

かなりのスピードで落ちてきたせいで大きな砂埃が舞い上がり男の様子がよく見えなかったが、やがてその土煙が風に流され、しゃがんでいる一人の男がその中から現れた。

男はゆつくりと立ち上がり周囲を見渡す。身長は190センチはあるだろうか。戦闘服を身にまとったガタイの良いその男の顔は、素顔が見えないよう銀行強盗が付けるような、目と口の周り以外の顔全体を隠す黒いマスクで覆われていた。

クリスとアリスを見つめた男は、少し考えるような仕草をした後、短刀を抜刀し2人に迫ってきた。

「ちっ、狙いは俺たちかよー」

「クリス気を付けて。あの人なんだか嫌な感じがする……」

クリスとアリスもナイフを手にして油断なく構える。

両者が激突し、戦場にまた砂埃が舞い上がった。

「……」

ヘリコプターから謎の男が飛び降りる直前、イタチもまた新たな敵と対峙していた。イタチの前で短刀を構えているのはなんとイタチとほぼ同年代の少年であった。

（この子供が持っているチャクラ刀、そしてこの禍々しいチャクラ…）

イタチは父の形見である魔法のナイフを口寄せし、油断なく構える。

「ファロットか…」

少年は応えず、短刀を手にイタチに突っ込んで来た。

（速い…それに前回戦ったファロットよりも…）

予想以上の攻撃のスピードにイタチは驚きながらも短刀の攻撃をナイフで受ける。

（一撃が重い…）

少年とイタチの間で数度刃が交じり小さな火花が飛ぶ。周囲の兵士たちは急に始まった別次元の戦いに唖然とする。

イタチを襲った少年であるレティシア・ファロットもまたイタチの実力に驚いていた。

（正直最初の一撃で殺せると思ったが…想像以上にやるじゃねーか）

ファロットですら受けきれないレティシアの連撃をイタチは難なく受けきっている。リンダの報告通り厄介な敵であることを認識し、レティシアは警戒のレベルと自身の攻撃のスピードを上げた。

レティシアの攻撃をイタチが受けたと思ったら、いつの間にかイタチが攻撃に回っていてレティシアも笑みを崩さず紙一重でその攻撃を避ける。気付いたら2人の立ち位

置が入れ替わっている。

常人には入り込む余地のない戦闘を目の前に、落ち着いている人間がもう一人だけいた。

背後からの殺気を感じたイタチが咄嗟にしゃがむと、コンマ数秒前にイタチの首があつた空間に短刀の軌跡が走つた。

殺気の正体はリンダ・ファロット。イタチが殺意とチャクラを大量に纏つた短刀を構えたリンダに視線を移した瞬間。イタチに向かって小さな塊がレテイシアから飛ばされた。

(石の礫か…)

単純明快。レテイシアは短刀を持っていない左手の掌に小石を乗せ、親指を弾くことによつて銃弾と変わりない速度で小石をイタチに飛ばしたのだ。

瞬身の術を使い2人から距離をとるイタチ。呼吸を整えようとしたイタチの目に映つたのは眼前に迫るレテイシアの短刀だった。

一息つく間もなくレテイシアとの戦いが再開。リンダのサポートとレテイシアの猛攻で、互角に見えた3人の戦いもファロット側に傾きつつあつた。

イタチがファロット達に苦戦している間、クリスとアリスも突然現れた謎の男に苦戦していた。正確に言うとは殺されかけていた、と言つた方が正しいかもしれない。

瞬身の術と変わり身の術で何とか逃げてはいるものの、男の猛攻を全て避けきること
は出来ず2人とも数か所に傷を負っていた。

「くそがああああ！」

クリスが叫びながら男に突っ込む。男はナイフの突きをぎりぎりの所で躲してクリ
スの顔面を右手で掴んだ。アイアンクローの状態である。直後、塞がっている右手側か
ら男の顔に向かってアリスがナイフを突き立てる。

男の顔面に突き刺さったと思われたナイフは、なんと彼が歯で啜えることによつて止
められてしまった。驚愕にゆがむアリスの顔を男は左手で包み込む。

長身の男に顔面を掴まれ、地面に足が届かない2人は男に蹴りを入れるがびくともし
ない。自分の顔を掴む力がどんどん強くなつていき、2人は死を覚悟した。

クリスとアリスの顔を今まさに握りつぶそうとしている男、レックス・ソウルは少し
拍子抜けしていた。

ファロットが殺しを成功できなかった影という組織。どの程度なのかを自分の目で
確かめようとアメリカから中東くんだりまで出向いたというのに、彼の目に映ったのは
そこらの傭兵と大して変わらないような烏合の衆と、一般人よりちよつと戦闘能力が高
いだけのガキ2人だけ。

全くもつて時間と金の無駄だったと思ひ、掌に力を込め2人の顔を握りつぶそうとし

はずだ……」

息も絶え絶えの3人は再びナイフを構えレックスを睨む。イタチが駆けつけるまで生きていられるか。彼らの命がけの時間稼ぎが始まった。

(この子供。体術はやはり上忍レベルか……このままではまずいな……)

イタチとレテイシアのスピードのギアが上がったため、スピードについていけないリンドは数メートル離れて援護射撃のみを行っている。

先ほどまではお互いが攻撃し合っていたイタチとフロットの戦いだったが、今はレテイシアの攻撃をイタチが受けるのみになっていた。もちろんイタチが大人であったならレテイシアを相手にしても難なく勝利を収めることはできるが、体が出来上がっていない今の状態だとレテイシアを相手にした殺し合いはかなり分が悪い。

とはいえ実のところレテイシアもイタチと同じ年である。前世の戦闘経験なんでものも当然持っていないことから考えると、レテイシアはイタチ以上の化け物だと言えるのかもしれない。

いつ勝利の天秤がレテイシアに傾いてもおかしくない状況の中、イタチはレテイシアの予想以上の粘りを見せていた。

(おかしい……。最初に刃を交えた感じからすると、もう俺に殺されているはずなんだけ

どなあ…)

現状を考えればレティシアの疑問も当然である。

(戦いの中で成長してるとか? いやそんな3流の映画みたいな感じじゃないな。だんだんと俺の動きを…。こいつには…何かが見えている…!)

「だが次で殺す…」

レティシアは今自分が出せる最速のスピードで短刀を一閃する。

(来る…。落ち着け…。そして見切れ!)

膨れ上がった殺気を感じし、イタチは回避に全神経を集中させる。

これまでの攻防を考えれば回避することは不可能な速度と絶妙なタイミング。

しかしその一撃はイタチに届かない。

(完全に見切った!? 馬鹿な…!)

最高の一撃を避けられたレティシアは目を見開きイタチを見つめた。

(ああ…。久しぶりで忘れていたが確かにこの感覚だ…)

レティシアの一撃を完全に見切ったイタチもレティシアを睨みつけ、両者の視線が交差する。

「!!」

(あの両眼…何だ…?)

レテイシアの目に映ったのは、勾玉模様が浮かび、赤く光ったイタチの瞳だった。

1986年8月 ②

「我々目的は、この戦争の痛みになることだ…」

「痛み…?」

「そうだ、戦争という殺し合いには必ず痛みが伴う」

「要領を得ないな」

「敵側の兵にも味方の兵にも仲間や友人、そして家族がいる。敵の兵士を一人殺せばその仲間や家族から恨まれ、復讐を願う者も少なくはないだろう。復讐されれば復讐しかえし、やったらやり返す。その繰り返しが始まり守りたいはずの仲間がお互いにどんどん殺しあってしまう。」

「それが痛みか」

「ああ。お互いに戦争を止めるのが一番だが、それはもう我々の力では不可能だ。だから我々は敵をひたすらに殺す…。我々の組織の名を目立たせ、この戦争の憎しみをできる限り我々に向けさせる。そして…」

「最後はボスであるお前を殺させて終いか…」

「違う。俺だけではない。我々の組織全員を皆殺しにさせて終いだ」

「…」

「だからその子供は我々の組織には…」

「…だとすると話がおかしいな」

「なんだと？」

「それならばなぜお前は——」

「ジッ！——オヤジ!!」

クリスの声にカールは我に返った。しゃがんだまま気が遠くなっていたらしい。

「…大丈夫だ」

何とか立ち上がるがその足元はよろよろとしていて危なっかしい。

「くそつ、もうチャクラもほとんどねえぞ！」

覆面の男を睨みつけながらクリスが悪態をつく。

カールとクリスの前に立ったアリスがアサルトライフルでなんとか足止めしているが、短刀に阻まれて男には届かない。それどころか男は銃弾を短刀で弾きながらじわじわとこちらに近づいてきている。

「やっばりおかしい…」

視線を男に合わせたままアリスが呟いた。

「何がだよ?」

クリスが叫び、カールも怪訝な顔でアリスを見つめる。

「私とクリスを捕えた時の動きをすれば、私たちなんてもうとつくに殺されていてもおかしくないはず。…あの人が、何かを警戒してる?」

カールとクリスに聞こえるように、アリスが声を抑えて話し終えた瞬間、覆面の男の姿が消えた。

「えっ?」

戦闘中に油断など一切していない。集中して相手に注目していたにも関わらず、敵の姿を見失った3人は背中合わせに周囲を警戒する。

「ふむ、慎重になりすぎたようだな」

上からの男の声がしたのとほぼ同時に、3人がいた場所を中心に半径数メートルのクレーターが出来上がっていた。

彼ら3人の反射神経では避けることは到底不可能な速度とタイミング。砂埃が晴れた時、その中心に立っているのはレックスただ1人であった。

（くっ、当たらねえ!）

先ほどまでは圧倒的優位に立っていたレティシアだが、イタチの眼が変化してからは

逆に防戦一方になっていた。

自分の攻撃は動きを完全に読まれていくのごとく空を切り、イタチの攻撃はスピードは先程とほとんど変わらないにもかかわらず避けるのもギリギリになっている。

(俺の動きを先読みして確実に急所を狙ってくる…。見えているのか)

今は何とかイタチの攻撃を避けられてはいるが、避け続けるのも時間の問題だった。

レティシアの眼前にイタチのナイフが迫る。

(やべ…)

イタチのナイフがレティシアに届く直前、リンダは咄嗟にイタチとレティシアの間に割り込む。

自分より20歳幼いたかが子供の殺し合い。しかし自分より圧倒的に強い2人の間に入り込んだ代償は大きかった。

レティシアは無傷のままだったが、リンダの左腕、肘と手首の中心から先がイタチに切られ宙を舞う。

「ぐあああつ…！」

片膝をつき激痛に顔を歪ませるが、残った右手で短刀を横なぎに払う。

周囲の兵たちは地面に落ちたリンダの左腕を見て静まり返っている。子供を守るため自らの腕を差し出した女にみな驚愕していた。

だが、リンダが命を賭して2人の間に割り込んだのは守るためではない。

(殺すためだ!)

はつきり言って、自分よりレテイシアの方がイタチを殺せる可能性は明らかに高い。だからレテイシアが手傷を負う事より自分が致命傷を受けることを選んだ。単純な理屈だ。

しかし目の前の敵、うちはイタチはリンダを見ていなかった。

(こいつ……あたしを見ていない。依然レテイシアを見てやがる……! 片腕を失ったあたしは敵じゃないってか!? 舐めやがっ……)

イタチの視線の先、レテイシアを振り返ったリンダは驚愕に目を見開く。

視線の先には痛みを必死に我慢するかのよう顔に歪ませたレテイシアの姿があった。

(どういうことだ……? あたしが庇ったからイタチの攻撃は受けていないはず……。外傷もない)

— 魔幻・枷杭の術 —

イタチが暁に入った直後、写輪眼を奪おうとする大蛇丸にかけた幻術。

血継限界、写輪眼を持つ者だけが使える瞳術。

レテイシアは今、体中に楔を打ち込まれている幻術の中にいた。

(くっ、俺に気付かれずにこの楔を打ち込んだだと…？ありえねえ！だがこの痛みは…)
(こんなレティシアの表情、初めて見る…。だがあたしのやることは変わらない…！)

人間としてではなく、1人の殺し屋としての信頼。6歳の少年でもレティシアなら少し時間をかければ立て直してくれる。ファロットとして迷いなくリンドダは時間を稼ぐため決死でイタチと相対した。

(カール達の方がかなり緊迫している…。このまま片を付ける)

迫るリンドダの短刀をナイフで受ける。片腕を無くしてなおこの気迫、見事としか言えないが、やはり両腕で戦っていた時よりも攻撃の質は格段に落ちる。

イタチはリンドダを蹴り飛ばしレティシアに向かうが、リンドダもすぐに体制を立て直して間に入ってくる。

(死ぬ覚悟でその子供を守るか…。しかし大蛇丸をも縛ったこの幻術をそう簡単には…)

リンドダの短刀を受け流しながらイタチは考えるが、急にレティシアのチャクラが消え、驚いた表情でレティシアに目を向ける。

幻術とは、相手の五感に働きかけ、その脳神経に流れるチャクラを己がコントロールする。というかなり高度な忍術だ。

自分が幻術にかけられた場合、その解き方はたった2つしかない。1つは誰かに自分

の体に触れてもらい、チャクラを流し込んでもらうことで敵のチャクラコントロールを乱すというもの。そしてもう一つは、己のチャクラの流れを一旦できる限り止め、術者のチャクラコントロールを上回る力でそのチャクラの流れを乱す方法である。

よって幻術を扱う忍びは、相手がチャクラの流れを止めたら自分のコントロールが乱されないよう気を引き締めなければならない。

(チャクラの流れを止めただと……いつまさか……)

視線が逸れたイタチにリンダの短刀が迫るが、イタチはそれを見もせず避け、鳩尾に一撃を入れる。リンダは気絶して崩れ落ちるが、この出血では数分で死に至るだろう。

イタチはレテイシアに向き直り、赤い瞳で彼を射抜く。

その時、イタチの後方ですさまじい爆発音が聞こえた。

(カール……。影分身を出すチャクラの余裕もない。状況は最悪だな……)

イタチは感知タイプではないが、大きすぎるチャクラを持った者がカール達を追い詰めていた事は感知できていた。カール達は今の一撃で死んだ可能性も高い。今すぐにそつちに向かいたいところだが、目の前の少年はそれを許さない。

ゆつくりと目を開いたレテイシアは自分の両腕を見つめ、ニヤリと口の端を吊り上げた。

巨大なクレーターを作り上げた張本人、レックス・ソウルの顔に笑みは無かった。彼は無言である兵士を睨みつけている。

(あーあ、こりゃ俺殺されるわ…)

両手に巻物を3つ持ち、何かを悟ったような表情で空を見上げる男。カール達3人をレックスの拳から救ったのはマリオ・ボツシであった。

イタチから戦闘前に渡されていたカール、クリス、アリスを口寄せする術式を書いた巻物。カール達は近くにいたせいで上空に跳んだレックスを見失っていたが、20メートルほど離れた場所で彼らの戦いを見ていたマリオには、上空に跳んだレックスもレックスを見失い周囲を窺う3人も良く見えていたため、巻物を広げてカール達を口寄せすることで3人を助けたのだ。

(ふむ、あの男には魔力は無いな…。となるとあのでかい紙、あれが人を移動させる魔法具という訳か…)

再び短刀を構え、マリオとカール達に歩み寄るレックス。

一度3人を助けることはできたとはいえ、マダックス親子とレックスの実力差は歴然。死という未来を十数秒先延ばしにしたに過ぎない。

だがその数十秒が大きな役割を得ることになる。

魔幻・枷杭の術をくらったレティシアは、幻術中はつきり言つて彼の人生で過去最高に焦つていた。いつ自分に楔を打たれたのかも分からない。このままだとそのうちに死ぬだろう。身動きも全く取れない。

だが、身動きを取れないというその一点がレティシアに希望を与えた。

(まあ戦つて死ぬのは仕方がねえ。だが、身動きがとれないのはある意味都合……。シアンが発動は少しの時間、完全に動いてはいけないという制限があるからな……)

リンダがどれだけ時間を稼げるか分からないが、発動までに俺とリンダがイタチに殺されたら俺の人生はそれまででっただけ。

そう割り切つてレティシアは自分の纏っている魔力を一度完全に解いた。

ファロットの秘伝、シアンの発動が完了し、レティシアは戦場の状況を完璧に把握する。

(レックスのおっさん、明日落ち合う予定なのに今日この戦場にいたのかよ……。しかもちよつとした手練れとやりあってほこぼこにしてんな。そして……)

目を開けたレティシアは自分の手を見てニヤリとほくそ笑む。

(あんな楔、俺に気付かれず打ち込めるはずねえとは思つたが、やはり……)

「まぼろしだったか……」

その言葉を聞いてイタチの眼がピクリと動いた。

そのままナイフを片手にレティシアに迫るイタチ。だがイタチの攻撃はすべて空を切る。しかも先ほどの攻防とは違い、レティシアは首を少し傾けただけ。必要最小限の動きでイタチの攻撃をことごとく避けている。

対するイタチもまた写輪眼を開眼したためレティシアの攻撃を全て紙一重で避ける。

短刀とナイフの歯をぶつけあっていた先ほどとは違い、お互い刃物を凄まじい速度で振り回しているのに一度も金属のぶつかり合う音のしないという不気味な攻防がしばらく続き、やがてお互いが同時に後ろに飛びのき距離を取る。

(攻撃が完全に読まれている……)

同時に全く同じ判断をした二人は戦術を変えることを決断する。

レティシアは短刀のつばを口に咥え両手のひらに小石を構え回避不可能な広範囲攻撃を、イタチは残りわずかのチャクラを使い幻術の使用を選択。

(いや……。もう幻術を使うにはチャクラが足りないか……?)

イタチが眼にチャクラを集中させた瞬間、レティシアは小石を捨てこの戦いで初めてイタチに話しかけた。

「成程、目を使った魔法か……。それでまぼろしを見せるのか?」

(杖を使わない魔法ねえ……。確か目を合わせた相手を即死させる大蛇がイギリスにいる

と聞いたことはあるが……)

レティシアの言葉に、イタチは少し考えるそぶりをした後、静かにレティシアに語りかける。

「そうだ……。この眼の前では全ての術が無意味。俺と目が合った瞬間、お前は終わりだ」
(ちっ)

レティシアは目を地面に向け、一度イタチから目を離す。

(考える……。目が合わせられないなら、足や体の動きを見て相手の動きを推察する。シアンが発動している今の状態なら問題なく対応できるは……ず……?)

イタチから目を離し、対策を練ったコンマ数秒のわずかな隙。

(しまった……)

目を上げると、そこにイタチの姿はすでに無かった。

(ふむ、周囲を見渡した感じだとあの魔法具を持っているのはその男だけのようだな。ならば4人まとめて叩き切る!)

短刀を構えレックスは4人に迫る。疲れ切った3人と瞬身の術のが使えないマリオで対応は不可能。確実に全員殺される。

そう判断したカールは3人の前に入る。

「俺が盾になる！お前たちは逃げろっ！！」

言う事を聞かない体に鞭を打ち、震える手でナイフを構えるカール。

絶体絶命と誰もが思ったレックスの攻撃だったが、短刀の刃がカールに届くことはなかった。

「…間に合ったな」

そう呟いたのはまだ幼い6歳の少年。レックスの短刀をナイフで受け止め、レックスを睨みつける。

もうイタチに幻術に使用するチャクラを練るスタミナは残っていないが、「刺し違えてでもお前を殺す」というとてつもなく強い意志を瞳に込め、イタチはレックスの目を見つめる。

地面に巨大なクレーターを作るほどの膂力を持つレックスの攻撃を受け止め、力強い瞳で睨みつけてくる子供。

(…いっつか！イレギュラーは…!!)

動きは一切無く、ただ睨み合うだけの二人。傍から見れば意味が分からないかもしれないが、それは正しく戦闘だった。

とても長い時間のような、終わってみれば数秒だったかのような2人の睨み合いは、レックスが目を逸らすことによって終わりを告げた。

レックスは後ろに飛びのき地面を思いつきり殴りつける。先ほどと同じぐらいのクレーターを作り土煙を巻き上げた。土煙が風に流され、クレーターが視認できるようになった時、レックスの姿はどこにも見えなくなっていた。

(退いたか…)

レイシアとレックスのチャクラは既に完全に感知できない。やつと気を抜くことが出来たイタチは、地面に崩れ落ちた。

(何とか乗り切ることは出来たが…。スタミナが少ない体でチャクラを練りすぎた…)

クリス達自分が呼ぶ声が聞こえるが、疲れ切ったイタチは意識を手放した。

戦場を悠々と歩く子供の姿があった。

しかし周りの兵士たちはだれもその子供に手を出さない。

子供を殺すのは可哀想だから？良心があるから？

いや、殺されたくないからだ。

イタチと互角の死闘を繰り広げたレイシア・ファロット。彼の戦いを見ていた周囲の歴戦の兵士たちは彼が近づくと道を開け、レイシアもそれが当然であるかのように立ち止まることなく歩き続けていた。

(しかし想定外の強さだったなあ。うちはイタチ…)

レティシアは先程の戦いを思い返す。

(だけどあいつ気付いていなかったな)

そう、先の戦いでレティシアのみが気づき、イタチもレックスも気付いていないことが一つだけあった。

(かなりの手練れっぽかったなあ。俺らの戦いを隠れて覗いてやがった奴は…)

1986年8月 ③

生きているものは1人としていない。死体だらけの戦場跡。

そこに立つ唯一の生者、一人の老人がいた。

「愚かな」とじゃ……」

老人はロープから杖を取り出し一振りする。すると大量の数の蓋のあいた木製の棺が現れ、全ての遺体がそれぞれの棺に入っていく。

杖をもう一振りすると、遺体からドックタグが外され棺の蓋が閉まり、ドックタグは棺の上にゆっくりと落ちて行った。

老人はドックタグを所有していなかった一つの遺体に近づき、悲しい目を閉じて数秒間祈りを捧げる。

死んだ時に自分の正体が分からないようにするため、自分に繋がる所有物を一切持つていなかったリンダ・フロット。老人はドックタグを棺の上に乗せる代わりに、彼女の使っていた短刀を棺の近くの地面に突き刺した。

「さて、そろそろ行くとするかの」

パチン、という音を残して老人は忽然と姿を消した。

数時間後、この戦場で勝利したイラン軍が自軍の死体の回収と敵軍の死体の埋葬のため戦場に戻ってきた時、大量の棺を見つけて驚き、本戦争の七不思議の一つに数えられることとなるのだが、それはまた別の話である。

「イタチと互角以上の戦闘力を持つファロットの子供に、地面に素手でクレーターを作る怪物か……」

「正にワンアーミーね」

「いくつもの戦場を経験した俺だが、ここまで化け物揃いの戦場は初めてだ……」

影を含めたイラン軍の野営ポイントにて、イタチから今日の戦いの説明を受けたマダックス親子は、額に汗を浮かべながらそう呟く。

「それにしても、イタチがいなければ我々はこの戦場で確実に死んでいた……。礼を言う。ありがとうイタチ」

「やるべきことをやっただけだ」

頭を下げるカールに、イタチは無表情のまま言葉を返す。

「命を救ってもらったイタチにこんなことを言うのはアレだが、相変わらずの化け物っぷりだったな。イタチ」

「全くだぜ！あいつの短刀をナイフで受け止めるなんて絶対やりたくねえ」

「どうやら笑顔で冗談を言える程度には回復したと判断したイタチは話を切り上げる。

「話は終わりだ。もう各々のテントに戻れ。俺も今日は早めに休むことにする」

「ああ、そうだな。クリス、アリー、もう寝るぞ」

「そろそろ出てきたらどうだ…」

3人の気配がテントから離れたことを確認してイタチは呟く。

数秒してイタチのテントの入り口が開いた。そこに立っていたのは、数時間前に自分と死闘を繰り広げた相手、レティシア・ファロットその人であった。

「よおー」

左手を上げて気軽に声をかけてくるレティシア、対するイタチの眼はいつの間にか写輪眼となっていてレティシアを油断なく見つめていた。

「少し出ないか?」

上げた左手の親指でテントの外を示すレティシア。少し考えるそぶりをしたイタチは、

「いいだろう」

そう呟きレティシアの後に続いてテントを出た。

2人は野営ポイントから少し離れた森の中まで移動する。ほとんど光のない暗闇の中、2人ともつまづくことすらない。やがてレティシアは少し大きめの岩に腰を掛け

た。

「…あの女の敵討ちか？」

しばらくの沈黙の後、先に声をかけたのはイタチの方だった。

「あの女…？ああ、リンダの事か」

しかしレティシアはそれを否定する。

「ずれてるぜ、うちはイタチ。あの女なんざどうでもいい。俺が興味を持っているのは…」

レティシアは右手の人差し指をイタチに向ける。

「お前の魔法だ」

話は数時間前に遡る。

イタチとの戦闘を避け、退くことを選択したレックス・ソウルは今までにないほど苛立っていた。

彼は今まで戦いで敗北したことが無い。常に捕食者であり、恐らく世界最強であるあの男との戦いにおいても互角に戦い、無様に敗走なんてしなかった。

「うちはイタチ…」

ギリギリと悔しそうに奥歯を噛みしめるレックス。今回はどう言い訳をしてもただ

の敗走である。

彼はイタチの眼の奥にある意志に恐れ、戦うこともせず逃げ出した自分自身を許せなかった。

(俺の力だけじゃねえ…：権力、財力、人生の全てを賭けてもあのガキは絶対に地獄に叩き落としてやる…！)

初めて敗北を知ったレックス。彼はイタチへの復讐を誓った。

「悪いが、俺は魔法というものが何のことなのかよく分からない」

何を言っているのか分からないという表情をするイタチに、レテイシアも少し混乱した。

「分からないってお前、自分で使ってたじゃねえかよ」

レテイシアの言葉にイタチはある仮説を立てる。

(まさか忍術の事をこの世界では魔法と言うのか…?)

「お前はあの纏っている力を魔力とは言わないのか？」

自身の体に魔力を纏わせレテイシアが問う。

「俺はそれをチャクラと呼んでいる。恐らくその魔力とはほぼ同義だろう」

イタチの言葉に満足した様子のレテイシアは新たに問う。

「そのチャクラとやらを利用して、幻を見せる魔法を使用したってことだろ？」

「…そうだ」

イタチの簡潔な答えを確認したレティシアは、短刀を抜き切っ先をイタチに向けた。「だったら話は早いな」

魔力を纏った短刀を向けられてもイタチの表情は変わらない。レティシアを無言で見つめたままである。

「その術、使い方と解き方を教えてもらおう」

レティシア・ファロツトは驕らない。まだまだ経験の浅い子供ではあるが、相手と自分の力量を冷静にはかる力を持っている。

そのレティシアが冷静に判断した結果。イタチに出会うまでは自分と同等か自分より強い可能性があると考えたのはファロツトの長リチャードと、レックス・ソウルの2人だけであった。「イギリスの悪魔」は出会ったことも無い上に、ファロツトに心臓を貫かれた事実もある。その判断はある意味正解と言えるかもしれない。

しかしイタチとの戦いで、自分の知識と力量では抵抗できない力があることを知る。自分が最強でなければならぬレティシアとしては、なんとしてもイタチの術を破るすべを身につける必要があった。

「お前を殺すのも一つの手段だとは思ったんだがな…。同じ術を使う敵が現れた場合、

対抗できる力が欲しくてな」

当然、自分と同等の力量の相手に手の内を見せるのはご法度。ナンセンスであるが、イタチには一つ気になることがあった。

「その前にファロット。俺の質問に答えてもらう」

あえて写輪眼を通常の眼に戻しレティシアを見つめるイタチ。

戦闘の意志を自分から消したイタチに、レティシアも短刀を鞘に収め無言で続きを促す。

「…俺の幻術を解いた後、お前のチャクラの質が大きく変わった。あれも魔法なのか？」
(幻術…ね。あの幻を見せる魔法は幻術というのか)

「YESでもありNOでもある…。あれはシアンという、ファロットの中でも長になる予定のものだけが教わる秘術だ」

少し考えた後、レティシアはあえて詳しくイタチに説明をする。

対するイタチも少し考えた後、

「いいだろう。俺の幻術について教えてやる。ただし、お前のシアンとやらについて教えてもらおう。それで対等だ」

あえて踏み込むことを決断した。しかしレティシアは腕を組み、難しい顔をしたまま応えない。

10秒ほど考えた後にレティシアはゆっくりと口を開く。

「…いや、それは対等じゃないな」

イタチの眼が少し細まる。

「お前の幻術とやらは恐らく魔法の技の一つだ…。だがシアンは魔法とは少し異なったまた別の術だ。魔法の技一つを教わるのと、魔法と同じような技の体系そのものを教わるのでは対等とは言えない。少なくともお前の他の技もいくつか教わるぐらいじゃないと割に合わないな…。どうだ？」

イタチも少し考える。実際幻術一つとっても相当奥の深い代物なのだが、そこまで言うという事はシアンという技もかなりのものなのだろう。

イタチの中で考えがまとまり、口を開こうとした瞬間、イタチとレティシアから数メートル離れた場所で、パチンという小さな音がした。

その瞬間、イタチはナイフを手に、レティシアは短刀を抜刀して同じ空間を睨む。

「ファロット、これも魔法か？」

「十中八九そうだろうな」

お互い、同じ空間から目を離すことなく会話する。いつの間にかイタチの眼は写輪眼となっていた。

「それにしてはお粗末だな…。姿と音は完全に消しているようだが、匂いが消えていな

い。これじゃ居場所が簡単に見つけられる」

「この距離ならシアンを使わなくても魔力感知できるしな。おそらく瞬間移動であろう術の音も丸聞こえだったし」

「瞬間移動の音を消すか、真後ろに来て素早く殺すべきだったな…」

「大した使い手じゃないかもね」

あえて相手を煽り、敵の出方を窺う2人。決して仲間ではないが素晴らしい関係プレーだった。

「君たちを殺す気など無いからのお…」

何も無い空間から老人の声が響く。イタチもレテイシアも表情一つ変えない。

「驚かせてしまったようで悪かったの。お詫びにレモン・キャンデーはいかがかな？」
その声と同時に隠れていた男の姿が現れる。姿を現したのはかなりの高齢であろう老人だった。

ヒヨロリと背が高く、髪と髭がとても長くベルトに挟み込んでいる。紫のマントを地面に擦り、淡いブルーの優しい目が半月型のメガネの奥でキラキラと輝きイタチとレテイシアを捕えていた。

（成程…：相当の使い手だな…）

イタチは老人を分析する。かなり老いてはいるが、そのチャクラはとても穏やかで且

つ力強かった。

「殺すつもりがないなら何の用だ？」

イタチと同じく、レティシアも相手の力量を感じ取ったのだろう。油断なく相手に一歩近づき質問を投げかける。

しかし老人はくつついたレモン・キャンディーをはがすのに夢中で聞こえなかつたらしい。やがて綺麗にはがれたレモン・キャンディーをイタチより近くにいたレティシアに差し出す。

「ほれ、レモン・キャンディーじゃ。わしゃこれが好きでな。甘くておいしいぞ」

「…そんなものはいらない。何の用かと聞いているんだ」

お気に入りのお菓子をレティシアにそんなもの呼ばわりされて、少しいじけた老人だったが、やがて静かに口を開いた。

「噂を聞いての。子供の魔法使いがマグルの戦争に巻き込まれていると…。事実を確かめるために出向いたのじゃが」

イタチを見つめ、その後レティシアに目を向けると老人は悲しそうな顔で2人に語りかける。

「まさか魔法使いの子供が2人もいるとはのお…。悲しい事じゃ…」

「マグルとはなんだ？」

しばらく黙って様子を窺っていたイタチが口を開く。

「おお、君はマグルに育てられたから知らなかつたんじやな。マグルとは魔法使いではない者たちの事じや」

イタチは腕を組みまた何かを考え始めた。

「ふむ、何をしに来たのか、じやつたか……。では単刀直入に言おうかの。儂は君たちにこの戦場から離れてもらいたいと考えておる」

「はあ？」

間拔けな声を出したのはレティシアだ。

「ボケてんのか？ジジイ……」

レティシアに失礼な言葉をかけられても、なお老人の目は優しいままだ。

「儂はイギリスでホグワーツ魔法魔術学校の校長をしているの。魔法使いの子供がマグルの戦争に巻き込まれているのはとっても心苦しい。君たちにはイギリスに来てもらって、11歳になったらホグワーツに通って欲しいと思っておるのじやよ」

「なるほど……アルバス・ダンブルドアか……。あんたがとっても良い人なのは分かつたよ。ただ悪いけどよ、俺はやらなくちゃいけないことがあるから無理だ」

飽きた顔で答えるレティシア。それでも老人の顔に動揺は見られない。

「アルバス・ダンブルドア？有名なのか」

再び口を開くイタチ。

「どうかの。名乗りが遅くなつてしまったの。儂の名はアルバス・パーシバル・ウルフリック・ブライアン・ダンブルドア。イギリスには友人も多いが、まあ魔法は割と得意じゃよ」

イタチにウインクするダンブルドア。

「アルバス、一つ聞きたい」

いきなりファーストネームでダンブルドアを呼ぶイタチだが、ダンブルドアは優しい笑顔のまま無言で先を促す。

「この戦場には俺たち2人以外にも子供の兵士が多数存在する。そいつらにも声はかけたのか？ 仮に我々だけにその提案をしたとなると、俺たちが魔法使いとやらだという理由か？」

イタチの冷静な質問に、ダンブルドアは少し悲しい顔をして応える。

「質問が2つじゃが両方に答えよう。もちろん全ての子供たちに戦争から遠ざかつて欲しいと思つてはおるがの、君たち以外に声はかけておらんよ。…そうじゃな2つ目の質問、YESかNOで答えるのであればYESじゃ」

ダンブルドアの答えを確認し、イタチも静かに応える。

「申し訳ないが俺もその申し出は断らせてもらう。俺が守るべき子供もここにはいるし

な……」

ダンブルドアは悲しみを含んだ笑顔で2人を見つめる。

「そうか……。予想はしておったがの。最後に君たちの名前を教えてはくれないかな？」

「うちはイタチ」

「レティシア・ファロットだ」

「ふむ、覚えておくとしよう。とりあえずは儂も引き下がるとするかの」

またパチンという音を残してダンブルドアはその場から消えた。

ダンブルドアが消え、静寂が2人を包む。

その静寂を先に破ったのはイタチだった。

「名をレティシアというのか。……いいだろう。お前のシアンを教えてもらおう代わりに、俺の術をお前に教える」

まるでダンブルドアとの話し合いなど無かったかのように、ダンブルドア登場前の会話の続きを始めるイタチの切り替えの早さに少し驚きつつも、レティシアはニヤリと笑みを浮かべ言葉を返す。

「契約成立だな」

ホグワーツに戻ったダンブルドアは、新たなレモン・キャンデーを袋から取り出し

口に含む。

その表情は悲しみに満ちていた。

「すまんのうアンナ……」

ダンブルドアのその眩きを聴いたのは、彼の傍らにいる不死鳥だけだった。

1986年12月

最初に彼が普通でないことに気付いたのは兄である。

決してわざとでは無かった。やっと走れるようになり、ある程度言葉を話せるようになったばかりの彼を抱いていた兄は、手を滑らせて彼を落としてしまった。

しまった、と思った時にはもう遅い。兄が弟に目を向けた時、彼は床に叩きつけられる直前だった。

しかしまたまた、運の良いことに、彼は足を床につき、その後きよんとした顔で尻餅をついた。

頭から落ちていたら死んでしまっていたかもしれない。兄はほっと胸をなでおろした。

その一か月後の話だ。兄の機嫌は最悪だった。修行が上手くいかず先生には殴られ、才能が無いとまで言われてしまった。

物にあたれば先生にもっと殴られる。このイライラをどうしてくれようかと思つていたところで、彼の寝かされているだけのベッドが目に入った。

今は毎日ゴロゴロしているだけのこの弟も、あと数年すれば自分のように毎日怒鳴ら

れ殴られることになるのだろう。

誓つて言える。弟の事は可愛いと思う。嫌いな気持ちなんてこれっぽっちもないはずだった。

だけど何故だろう。兄は無意識に両手を彼の脇の下に入れると、ベッドから自分の顔の高さまで彼を持ち上げ、床の上でその手をぱつと離した。

弟は当然床に落下していく。そしてこれまた偶然か、彼は今回も足から床についた。今度は尻餅することなく、そのまま自分の足でしっかり立っていた。

彼の目に怒りや悲しみの色は無い。不思議そうな、きよとんとした目でまた兄を見つめていた。

兄はつまらなくなつて弟を床に放置したまま部屋を出て行った。

その夜、ぐっすりと眠っていた兄は激痛に目を覚ます。右手が焼けるように痛い。

何事かと思つて目を開けると、自分の胸にちよこんと座っている弟の姿が目に入った。何かを頭の上に振りかぶっているようだ。

キラリとそれが光った事に気付いた時にはもう遅い。弟の振りかぶったそれは兄の左手に突き刺さっていた。

兄がはつとして自分の左手を見ると、驚いたことに自分の左手はナイフに貫かれていた。右手を見てみると、なんと右手もナイフに貫かれている。

弟に目を移すと、彼は3本目のナイフを両手でたどたどしく構えたところだった。しかし彼はそのナイフを振りかぶることをしなかった。

殺意も憎しみも何もこもっていない、ただちよつとした疑問があるとしても言いたげな目で兄を見つめている。そして兄が目覚めてから初めて弟は口を開いた。

「なんで殺さなかったの?」

彼は心底不思議そうな目で兄に問うのだ。

兄としては訳が分からない。殺す? 誰が? 誰を? 殺さなかった? 何のこと? 怖い怖い怖い怖い…。

あまりに非現実的な状況に頭がついて行かず、麻痺していた兄の体はここにきて恐怖により正常に働きた。同時に両手の痛みも襲い掛かってくる。

「う、うわあああああああ!!!」

叫び声と泣き声が入り混じったような絶叫に、使用人や近所の人々が何事かと部屋に押し寄せてきた。

部屋に入ってきた大人たちが見たものは、両手のひらをナイフに貫かれ泣き叫ぶ兄と、その兄の胸の上にすわり、不思議そうな顔でナイフを持っている弟の姿であった。

慌てて医者を呼び両手の傷を診せたが、もう二度と兄の手は剣を握ることが出来なくなっていた。

大人たちは当然彼を叱った。「これはおもちゃじゃないんだよ」「君はお兄ちゃんを殺してしまふところだったんだよ」と。

彼は首をひねり相変わらずきよんとしている。どうやら悪いことをしたという意識が無いらしい。

さてこれは怒らないと、と大人たちが思ったところで彼が言葉を発する。

「なんで、俺の事を殺さなかつたんだろう?」

大人たちは困惑した。この子供は一体何を言っているのだろうか。殺そうとしたのは弟のこの子ではないか。

「ちよつと失礼」

いつからそこにいたのか、大人たちが振り返ると、開かれたドアに背中を預けて腕を組んでいる男の姿がそこにはあつた。背がひよろつと高く、綺麗な金髪が暗闇でも目立っている。

「ぎ、行者の方の手を煩わせることは……!」

まだ20代中盤に見えるこの男は、他の大人達より立場が上らしい。

男は彼に近づき、しゃがみこみ彼に視線を合わせる。

「俺がお前の疑問に全て答えてやる。だがその前に俺の質問に答えてくれないか?」

金髪の男は彼ににこやかに話しかける。彼はこくりと頷いた。

「何でお兄ちゃんを刺したんだい？」

金髪の男と彼の問答が数回続く。それにつれて周りの大人たちの顔からは血の気が引いていく。金髪の男の顔も少しだけ引き攣っていた。

「なあ？俺はおかしいのか？」

彼が周りの大人たちに目を向けると、その大人たちは震えあがって彼を指さし口々に叫んだ。「化け物だ！」「人の皮をかぶった悪魔だ！」「なんと恐ろしい」

大人たちは顔面蒼白。恐ろしくなつて部屋から蜘蛛の子を散らすように逃げて行った。

大人たちとは違い、金髪の男は笑いを必死にこらえようとして顔をひきつらせていた。思わぬ場所でお宝を見つけたような、そんな言いようのない興奮に身を震わせていたのだ。

「ロニーの兄貴よ。それでそのガキはなんで兄を刺したんだと思う？」

「うーん、見当もつかないよ」

「曰くな、『俺を命の危機がある高さから落とした。一度目は事故だと思ひ見逃したが、驚くべきことにもう一度俺に同じことをした』と」

金髪の男は続きを話したくて仕方がないらしい。ロニーと呼ばれた男の顔を覗き込

むように目をキラキラさせてしゃべってくる。ロニーは苦笑をしながら付き合っていることにした。

「それで？」

「『と、言う事は俺を殺すつもりだったってことだろう？』と俺に言う訳よ！」

「それでお前は何て答えたんだ？」

「当然『その通りだね！』って笑顔で答えたに決まってるじゃねえか！それでよ、『だから殺そうと思った。当然だよね？』って無垢な瞳で見つめてくるのよ。正直俺もゾツとしたね」

「だが一理ある」

「まさに！殺されそうになったから殺し返す。単純な理屈だ！けどな、いざ殺しに行こうってなった時にちよつと気になったんだってよ。」

「成程。それが『なんで殺さなかったの』という質問の真意だったと言う事か」

「ご名答。『俺を殺そうとしたんだから、俺に殺されることが分かっているはずなのに』何でしつかり殺さなかったんだろう』って疑問に思っただけなとき。『だからいきなり殺さずに、ちよつとベッドに張り付けて質問しただけなんだ』ってよ。『いきなり殺さずに、一応話を聞いてあげてから殺そうとした俺って優しいよね？』って真顔で俺に言うんだよ」

「周りの人たちは面食らっただらうね」

クスクス笑いながらロニーは金髪の男の話の続きを待つ。

「ドン引きもドン引き！このガキは里の奴らの手には負えないと判断して屋敷に引つ張ってきた訳よ！」

「その判断は？」

「大正解！リチャード様のテンションがあんな高くなつたの初めて見たぜ」

「それで、その子を連れて来たのが2年前と言つたつけ」

「ああ、年が明けたばつかの頃だぜ」

「で、その騒動の時、その子は何歳だつて言つてたつけ？」

金髪の男はニヤリと笑う。

「ロニーの兄貴、驚いてずっこけないでくれよ！」

「3歳の頃だ」

「と言う事は今彼は単純計算で5歳な訳だよね」

「おっしゃる通り！」

「もう一度だけ言うよ？」

金髪の男は答えない。やれやれと肩を竦めながら、本日3回目になるその質問を待った。

「そのレティシアつて5歳のガキに、リチャードの親父以外のファロットが全員ボロボロにされたつてのは何の冗談だい？パトリック」

金髪の男、パトリック・ファロットは応えなかった。代わりに、パトリックが開けた扉の奥からまだ幼い子供の声が聞こえてくる。

「あんたがロニー・ファロットか」

ロニーは笑顔で応える。

「そうだよ、よろしくね。レティシア・ファロット」

その日レティシアは、5歳にしてリチャードの次のファロット一族の長になることが決定した。ファロット一族700年の歴史の中でも異例中の異例の出来事であった。

1986年12月

レティシアからの手紙がリチャードに届いた。

手紙の内容は以下である。

「結果から言うと、影の皆殺しは非常に困難である。原因は1つ、うちはイタチの存在。来年の夏までにうちはイタチを殺せる確率は五分といったところ。その後影を皆殺しをするととなると厳しいものがある。

そしてうちはイタチの成長スピードは自分から見ても異常である。

ファロットをもつてしても、自分以外の行者では来年の夏には手も足も出なくなる可能性がある。

可及的速やかに人員を増やし、この冬中に一気に片を付けるべき。

ロニーか、それに準ずるレベルのファロットの追加を要求するものである。」

当然このまま書いてある訳ではない。暗号により、ファロットの一族以外には読めないものになっている。

リチャードは少し唸る。

ロニーとはレティシアの次に有能なファロットだ。彼は今10人のファロットを引き連れてソビエト社会主義共和国連邦にて連邦崩壊のための裏工作を行っている。春頃にチエルノブイリ原発の事故を成功させ、5年以内にバルト3国を独立させる手筈だ。

中東の小国の戦争とは規模が違う、正に今のファロットのメインとなる仕事だ。

とてもじゃないが、傭兵殺しごときにロニーは渡せない。

かと言ってレティシアやロニーに準ずるレベルのフロットも存在しなかった。決してフロット一族の人材が不足している訳でも、レベルが低い訳でも無い。

レティシアとロニーのレベルが高すぎるのだ。力の差がありすぎると、連携は上手くいかない。

リチャードは少し悩んだが、結局、増援は送れないとレティシアに手紙を出すこととした。

「悪かったな。遅れちまって」

確実に悪かったとは思っていないだろう。ヘラヘラと笑いながらレティシアはイタチに近づいて来た。イタチも別段怒っている様子は無い。いつも通りのポーカーフェイスで淡々とレティシアに言葉をかける。

「始めようか…」

イタチとレティシアによる修行。

レティシアはシアンを、イタチは幻術とその他の忍術をお互いに教えあっている。

圧倒的な実力者2人の修行は、実のところ驚くほど上手くいっていなかった。

「だからさあ。そんな俺を警戒したらシアンの変動なんて無理なんだって」

そもそも修行には信頼関係が必須である。弟子は師匠を信じ、完全に無防備にもな

る。

イタチとレティシアは敵同士なのだ。その相手に隙を与えるなんて本能に近いレベルで不可能な事であった。

必然的に術の理論と修行方法を教え合い、1人で修行することになる。そして次会った時に疑問点を解消したり次の修行に進んだりする。

ありえないほど非効率のなうえ、普通の人間にそんな事は無理だ。だがこの2人は普通の人間ではなかった。

一度コツを掴んでしまえばスポンジが水を吸収するように、彼らはその技を身体で理解していった。その日もお互いの途中経過を報告し合い2人は別れた。

イタチとレティシアが会ってからもうすぐ4ヶ月になる。

暖かい地域とはいえ、イランの冬も寒い日には0℃近くの気温になる。大地には寒風が吹き荒び、容赦無くイタチの身体に襲いかかった。

厚着をしているようには見えない。かと言って寒がって言うようにも見えない。

事実イタチは寒さなど感じてはいなかった。目を閉じたまま微動だにせず大きな岩の上で座禅を組んでいる。

「シアンってのはな。魔力と、大地や大気の力を融合させた力を使用した術の事だ」

淡々とレテイシアが語る。

イタチとしてはある意味予想通りの力だった。

(自然エネルギー…やはり)

「魔法なんてのは結局、自分の内側のエネルギーを上手く運用して使用するものだ。だが大地や大気からそれに近い力を取り込むと、容量も増える上に体術や魔法の力も大幅に増加する」

イタチは確信した。これは間違いなく

(…仙人モードだ)

よくよくわからないものである。死んだ後、謎の世界で新たに生まれ、そこには前の世界と同じような力が存在する。いい加減頭が痛くなりそうだ。しかしここは幻術の中ではなく現実の世界であることは間違いない。

「今更だが、一族の秘術だろう。そんなあつさり教えてしまっていないのか？」

雑念を払う為だったのかもしれない。イタチはレテイシアに声をかけた。

最強の一族の中で天才と言われる少年は、少し醒めた目になってその質問に答える。

「一族…一族つてよお。一族に執着し、ファロットという名に執着する…。馬鹿らしい。自分で自分を制約しちまってやがる…」

「…」

レテイシアの言葉に対し、イタチは肯定も否定もしなかった。

イタチが岩の上で動かなくなってから約3分後、イタチはゆっくりと眼を開けた。

(やはり駄目か…)

眼を閉じている時にはできていた眼の周りの隈も、眼を開くと消えてしまう。

原因は1つだった。仙人モードになるには圧倒的に、自分自身の

「チャクラが足りないな…」

仙人モードになるには、つまりシアンを使うには自然エネルギーとバランスを取れるほどの身体エネルギーと精神エネルギーが必要なのだが、イタチにはその両方がまだ全くもって足りていなかった。

余談ではあるが、ちなみにレテイシアも幻術タイプではなかったため、幻術を解くことはできてかかえることは出来ない。

もう一度だけ述べようと思う。

2人の修行は、実のところ驚くほど上手くいっていなかった。

それから2週間後。もうそろそろ1987年を迎えようかという年末に、影にとって最悪の知らせが届いた。

カール、クリス、アリスを含め影のメンバー60人ほどが参加したイランの大規模作戦が大失敗したとの報告だった。

1987年1月

1986年12月25日のクリスマス。イラン軍はイラクのバスラ県に総攻撃を仕掛けた。

イラントップの国家元首とマジユリス議会の議長は1987年の3月には戦争を終結させると宣言。本作戦を決戦と位置づけ、8万人の兵士を使い一気に形勢を傾けようとした。

イラン側に雇われている傭兵組織「影」も当然参加することとなり、影のボスであるカールは約60人のメンバーをひきつれて戦場へと向かった。

ボスのカールとその双子の子供、クリスとアリスを含め影の主要な構成メンバーはこの作戦に参加している。

アジトに残ったのは、イタチとマリオを入れて20人程だ。

イタチも含めイラン側の兵士は、この決戦はかなり長引くことになりそうだと考えていた。

しかしその予想は裏切られることになる。

8万人の兵で突撃したこの超大規模作戦はなんとイラン側に3万人以上の死傷者を

出し、驚くべきことにたったの2日で終了してしまった。

イラン側の大敗北である。

イラク側の縦深防御作戦が成功し、最前線にいた影の面々の生死すら分からない状態だった。

普通に考えれば生存確率は0%に等しいが、チャクラを利用できるマダックス親子に閉しては生きている可能性もある。

僅かな望みにかけて、1987年1月8日に実施される次の大型作戦に残りの影のメンバー全員が参加することになった。

当然イタチも最前線での参戦である。

1987年1月4日

イラン軍との合流ポイントに向かっていった影のメンバーは、途中の小さな村で先の作戦で生き残った影のメンバー1人を見つけた。

作戦の途中で利き腕を撃たれ朦朧とした意識のまま逃げていたら、たまたまこの村の住民に助けられたらしい。

体が傷だらけで、影のアジトに帰ろうにも身動きが取れなかったとのことである。

彼が寝かされている村の住人の家に影のメンバーが集まり、年末の作戦の詳しい内容

をきくことになった。

男が悪夢の作戦を語ろうとした時、イタチが部屋に入ってきた。男はイタチを見るとしばらくかたまり、1度深呼吸するとイタチを睨み付け怒りに満ちた顔で捲し立てる。

「イタチ！テメーこのクズが……！よく俺の前に出てこれたなこの野郎!!」

男のあまりの剣幕に影の面々はおおいに驚いた。なぜアジトにいたはずのイタチにここまで怒っているのかも、戦場で何があったのかも分かっていないのだ。

なんとか男を落ち着かせ、当日に何があったのかを聞く。皆真剣な表情である。

男はやがて重い口を開いた。

イタチを指差しこう告げる。

「イタチだ……。作戦開始と同時にこいつがカール達をぶちのめしてイラク側に引き渡しやがったんだ!!」

1986年12月25日

シャツタルアラブ川、バスラの対岸に当たる位置に、カール、クリス、アリスを含めた影のメンバーが集結していた。カールの顔色はあまり良くない。

カールが影を作った目的は、この戦争の痛みになり、憎しみの対象である自分達を殺してもらおうことだ。

この戦争で確かに影の名はそれなりに知られるものとなったが、憎しみを一手に引き受ける存在になれたかと言うとはつきりいってそんなことはない。敵からしたら警戒に値する組織になれたというのが精々の評価だった。

そんな状況で、この戦争の決戦に挑むことになってしまった。

厳しい戦いになると思うが、バスマラ県を落とすことができれば恐らくこの戦争の勝利は確定するだろう。

現状に文句を言っていないでも仕方がない。この作戦で影の名を恐怖の代名詞にしてやる。と思ったところで、一斉攻撃の合図が響く。

「よし！全力で行くぞ!!」

カールの檣に影のメンバーは鬨の声を上げる。少数の組織とはいえ、実力者揃いの影の咆哮である。半端な人間ではその勢いに後ずさってしまうだろう。

気合いを入れて船に乗り込もうとした先頭の男は、船に足をかけた瞬間、船の内側から誰かに吹き飛ばされて岸に落ちてしまった。

「誰だ!!」

船を睨み付けカールが叫ぶ。船の中から顔を出したのはなんとこちらはイタチだった。

「・・・」

無言で影の面々を見下ろすイタチ。

見知った人間の登場に、カールは落ち着きを取り戻しイタチに語りかける。

「なんでアジトにいるはずのお前がここに來てるんだ？何か緊急の用があるのか？」

イタチがその質問に答えることは無かった。

影のメンバーを一瞥すると、静かな声で彼らに口を開いた。

「残念だが、あなた達の戦いはここまでだ……」

そう言った瞬間、イタチの姿が船の上から消える。彼の動きをとらえることが出来た者はそこにはいなかった。

「えっ」

イタチが移動したことに気づいた時には、既にクリスとアリスが当て身を入れられ気絶していた。2人を両腕に抱え、カールの鳩尾に蹴りを入れるイタチ。ものの数秒で影は主力を失ってしまう。

そのまま気絶した3人を担ぎ、驚くべきことにイタチは川の水面をバスラ県の方向へ走り去っていった。

唾然としたのは残された影の人間たちだ。何が起こったのかわからない彼らのもとにイラク軍から銃撃の嵐が降ってくる。何てことはない。普段の彼らなら落ち着いて対応が出来たであろうが、ボスを失った彼らに冷静さはなかった。そのまま作戦に参加した影は壊滅へと向かっていったのである。

安否不明のカール達3人を除けば、生き残ったのは村で保護されていた先の男ただ一人となった。

1987年1月5日

男の独白に、影の人間は言葉を発することができなかつた。

「ありえない」とは誰も言えない。そんな人間離れた芸当でもイタチであれば恐らく可能であろうし、何よりも語る男の目に嘘の色は一切なかつたのだ。

だが実際イタチは50km以上離れたアジトにいたのだ。さすがにそれだけ距離の離れた場所ですんなことは・・・イタチならば出来なくはないかもしれない・・・。

そんななんとも言えない雰囲気の中、男はトドメの一言を放つ。

「イタチよお、お前今年の夏以降、よく1人でアジトを抜け出してたよな・・・。いつもどこに行つてやがつたんだ？」

イタチは答えない。男はそれを無言の肯定だと受け取つた。

「てめえが・・・！てめえがイラクと繋がつてたんだろ!!ボスをどこに連れていきやがつた!!」

部屋が静まり返る。

「イタチ・・・」

マリオが心配そうにイタチの顔を覗きこんでくる。

「俺はカール達を襲ったりはしていない……。アジトを出ていたのは修行のためだ」
男は歯軋りさせながら声を捻り出す。

「……だったらよお。お前と同じ顔で、ボスとクリスとアリスを一撃で気絶させられて、水面を歩くことができる奴が他にいるってのかよ！ふざけんじゃねえぞテメー！」

周りの男達も、疑惑に満ちた目でイタチを見つめる。

イタチはその目をよく知っていた。

『同胞殺しのお前が言うセリフじゃねーな』

『あの眼は昔のまま……』

(まずいな……)

前回の作戦の失敗と戦闘前の緊張感で影メンバーのメンタルが弱まっている。

(こうなってしまうと誤解を解くのは難しい)

イタチが否定をすれば男が反論する。話は平行線のままでこの日は何の結論も出なかった。

そして、イタチと影の関係が改善しないまま作戦当日を迎えることになる。

1987年1月8日 22:00

作戦の決行は本日深夜。所在の分からないカールの代わりにマリオが”影”のボス代行となっており、バスラ東方国境の村シャラムチエから程近い森の中で野営している。

大き目のテントの中ではイタチを除いた影の構成員15名が作戦の最終打ち合わせ中だ。犠牲を払った先の作戦でシャタルアラブ川の中洲4島の内3島はイランが占領している。戦闘で先手を上手くとればイランの勝利で終わる。それが大方の意見である。

作戦会議も終わり出撃時間まで各々自由に過ごそうとテントからメンバーが出ようとしたとき、外から銃撃音が聞こえた。

何事かとメンバーがテントの外に急いで出ると、見張り5人の内4人が地面に倒れ、残りの一人が必死の形相でこちらに走ってきた。

「一体何事だ？」

マリオは見張りの男に尋ねる。

「わからねえ……。俺たちは5人でテントの周りを警戒していたんだ。気づいたらそこに3人倒れててよお。そいつらを見に行つたあいつの頭に闇の中から飛んできたナイフが刺さって……。だからナイフの飛んできたあたりに一発ぶち込んだんだが……」
腰が抜けたのか座り込んでガタガタと震えながら男は語る。

ハンドガンやライフルを手に周囲を警戒する影の面々。

「・・・イタチはどこにいる?」

誰にとも無くマリオが質問する。

「いつ裏切るかも分からねえから、シヤラムチエ村に食料を取りに行かせてる。この襲撃があいつじやなけりやあと30分程で戻るはずだ・・・」

ガサリ、と闇の奥から足音が聞こえた。

「誰だ!?!」

音のした方向へマリオが声をかける。

「イタチか?もう帰ってきたのか?」

そう声をかけた瞬間、闇の中からナイフが恐ろしい速度で飛んできた。そのナイフはマリオの隣にいた男の腕に突き刺さる。

「がああああ!!痛え」

攻撃を受けてからのマリオの決断は早かった。

「撃て!!」

マリオの宣言と同時にナイフの飛来した方向に銃弾を打ち込む影のメンバーたち。

「よし、囲い込むぞー!」

マリオは慎重な男である。カモツラを抜け、なお生き残った彼は危険に敏感だった。

そして今まだ危険の臭いは消えていない。慎重に慎重に獲物を捕らえようとしていた。

1987年 年始

イラク内のアメリカ軍駐留施設。その施設の中にレックスとレティシアがいた。レティシアは部屋に備え付けられたテレビをつまらなそうに眺めている。

「もう行くのか？」

尋ねるレティシアに

「ああ、こつちの種はもう蒔いた。レティシア、終わったたら新しい方の依頼にすぐ取り掛かってくれ」

レックスは落ち着いて応える。

「もちろん。俺が行くまでに死ぬんじゃないぜ」

肩をすくめながらレティシアがそれに応える。レックスは少し笑ってドアから出て行った。

「こつちはこつちで気合を入れないとなあ」

レティシアはブラウン管から目を離すことなく、気合の入っていない声で呟いた。

襲撃者は圧倒的な強さだった。

音を立てずに一人一人的確に敵を殺し、残る影の仲間も5人しかいなくなっている。

(なんてこった……。武装した影を圧倒かよ。姿すらみえねえ)

そんなことを考えている間にまた1人投げナイフで首を貫かれ、生き残っているメンバーはマリオを含めて4人しかいなくなってしまった。

影、事実上の崩壊である。

人数が少なくなっただめだろうか。襲撃者はマリオたちの前に姿を現した。

全身を黒い戦闘服に身を包み、顔はフルフェイスのヘルメットで覆われうかがい知ることができない。身長は180を超えているであろう大柄の男だった。

マリオは一瞬去年の夏戦場にクレーターを作った男かと思ったが、あの男はさらに大柄で、闇に乗じて攻撃するタイプではなかったことを思い出す。

(こいつは一体誰だ……。?)

男は一瞬でこちらに接近し、マリオ以外の3人を瞬く間に切り伏せた。男はナイフから短い刀に武器を持ち替える。

かなり短めの、刃が少しぼれている、殺傷能力はあまり高くなさそうな刀だ。とはいえこれだけの実力者である。この敵が仮に木刀を持ったとしてもマリオでは一瞬で殺されてしまうだろう。

マリオは両腕を下ろし死を覚悟した。

襲撃者が影を襲う少し前。

イタチは影のための食料を手に、今後のことを考えながら影の野営ポイントに向かい歩いていった。マダックス親子を救出した後は、影を抜けることも視野に入れなければならないかもしれない。

戦闘前の興奮からか、影のメンバーからの懐疑心のせいも、先ほどからずっと妙な胸騒ぎがする。

まず大前提として、イタチはカールたちを襲ってはいない。ではイタチの姿をした人間は誰だったのか。

(十中八九…)

「レテイシア。お前だな…」

闇を睨み口を開くイタチ。

「よう。この前ぶりだな」

イタチの目線の先、太い木の裏からレテイシアが現れる。相変わらず余裕たつぷりの表情だ。

「俺に変化して影を襲ったお前がよく俺の前に姿を現せたな」

すでにイタチの眼は写輪眼に変わっている。

「あれ？もうバレてるのか？まさかあの最前線で生き残れる影のメンバーがいたとは思わなかった」

「重症だがな。それで、カールたちを攫って影をどうするつもりだ？」

より鋭い眼光でレティシアを睨むイタチ。相對してからレティシアはイタチに目を合わせてこない。

「イタチさあ。お前平和ボケしてないか？俺の目的は影の皆殺しだって説明しただろうが。一緒に修行したオトモダチだから影を襲うのは中止してくれるとも思ったのか？」

軽く馬鹿にした笑みを顔に貼り付けイタチの殺気をものともしないレティシア。

「だがまあ、理由ぐらいは話してやってもいいか。何から知りたい？」

両手を広げ質問の答えを待つレティシアだったが、レティシアを襲ったのは言葉ではなく銀色に光るナイフだった。

一瞬で距離をつめたイタチ。しかしレティシアの予想の範囲内だったのか、レティシアも難なくその刃を短刀で受ける。

「いきなりじゃねえか」

「…時間稼ぎがみえみえだ。何を狙っている？」

鏢迫り合いながら会話する2人。

「だってよお」

ニヤリと笑いレテイシアが答える。

”俺の仲間”が今影を襲ってるんだから、お前に邪魔されちやかなわないだろ」

イタチは一瞬驚いた顔をした後、少し微笑んだ。

その直後レテイシアの顔から表情が消える。

「おいイタチ。お前なんで…」

刃をはじき合い少し距離を取る2人。そしてレテイシアは怪訝な表情をしてイタチを睨む。

「後ろにいた影分身を消した？」

(シアンを使わずあの影分身に気づくか…。相変わらずの感知能力だな…)

「俺でもギリギリ気づいた。なぜ分身体で隙を狙わず、魔力を消費して作った影分身を消した？」

鋭い表情で質問するレテイシアに、イタチは無表情で言葉を紡ぐ。

「決まっている」

そう言うといタチはナイフを袖に戻し構えを解く。会話の途中であろうとその隙を逃すレテイシアではない。

レテイシアの短刀がイタチを貫いた。

「俺の本体にこの情報を知らせるためだ」

イタチの体だったものが無数のカラスに変わる。鳴き声と共にカラスたちは空に飛び立った。

「チイツ」

レテイシアの口から舌打ちがこぼれる。しかし

(しかしまあ、計画を考えればこの方が都合が良いか…)

影の最後を確認するため、レテイシアは短刀を鞘に収め、影の野営ポイントに向かった。

イタチの本体が太い木の枝を踏みしめ猛スピードで影の野営ポイントに向かっていく。

買い付けが終わった後、胸騒ぎのため、チャクラを消費するリスクを犯してまでイタチは2体の烏分身を作った。

1体を目立つように歩かせ、もう1体にそれを尾行させる。

本体は一度身を隠した後別ルートで誰にも見つかからないよう慎重に野営ポイントに向かった。

当たって欲しくない予想が当たり、現状を把握した尾行している分身体が自分の意思

で分身を解除。本体に情報を伝える。本体は情報を把握し、急いで野宮ポイントに向かっている。

見えた。

今まさにマリオが男に刀で貫かれようとしている。

(だめだ…間に合わない…！)

マリオは死を覚悟した。完全に手詰まりだ。自分ではもうどうしようもない。

以前にもこんな状況があったことを思い出す。殺される直前のカールたちをイタチの巻物で救い、クレーター男に殺されそうになった時のことである。

(くそ…ここまでかよ)

「すまねえな、カール…」

目を閉じて自分を殺す攻撃を待つ。しかしいつまでたっても痛みが来ない。マリオは恐る恐る目を開けた。

「すまねえな、カール…」

その言葉がイタチの耳にも届いた瞬間、マリオを殺そうとしていた襲撃者の動きが一瞬遅くなった。

(これなら間に合う……！)

イタチはトップスピードに乗ったまま、襲撃者の刀を素手で抑え、ナイフを襲撃者の首に突き刺した。

これで襲撃者は死に、マリオは助かった。しかし何だろうか、何か取り返しのつかないことをしてしまったような妙な違和感を感じる。

この違和感の正体は何なのだろうかと考えようとした刹那、背後から殺気を感じた。

「おつ、ちようどクライマックスじゃねーか！」

レティシアが野営ポイントに到着した時は、正に襲撃者がマリオを殺そうとする瞬間だった。必死にイタチが間に入ろうとしているが、

(ありや間に合わねーな)

そう判断し結末を見取ろうとする。

だが予想に反して襲撃者の動きが遅くなる。結果、イタチは襲撃者を殺しマリオを助けることに成功した。

「まじか！これはこれで面白いけど、影の構成員が生きてると困るんだよね」

レティシアはそう呟くと、小石の礫をイタチとマリオに向けて飛ばす。

(あの体制じゃ、イタチは避けられてもあの影の生き残りは死ぬかな)

自身に飛ばされている石の礫を認識しながら、イタチは気づいてしまった。自分のしてしまった行為の意味に。

(なぜこいつが影を襲う？マリオを襲う？何をしたレティシア…)

イタチがしてしまったこと。

それは ” 影のリーダーであるカール・マダックスを自分の手で殺してしまった ” という恐ろしい事実であった。

襲撃者の正体はカール・マダックスその人だった。理由は分からないが、カールは1月8日の作戦に参加しようとした影のメンバーを皆殺しにした。

そしてマリオも殺そうとしたカールの首に、イタチがナイフを突き刺したのだ。

なんてことは無い。カールとイタチが ” 影 ” を殺したというだけのこと。

もうイタチの決意は決まった。 ” イザナギ ” を使ってもマリオは守る。

だがここで、誰もが予想していなかった事態が起こる。

1986年 大晦日

カールが目を覚ました時、自分の両手首は後ろ手に縛られて椅子に座らされていた。8畳ほどの窓も無い殺風景な部屋の中、ブラウン管のテレビとテレビにつながっている大きな機械が目立っている。

ここはどこなのか。クリスとアリスは、影は無事なのか。イタチの目的は？戦争はどうなったのか。

「目が覚めたか」

背後から男の声がする。振り向き声の主を確認したカールは驚きで表情が固まってしまった。

「まさか…、なぜあなたがここにいます」

男は無表情のままカールを見つめ続けている。

自分がアメリカ軍にいた頃上官だった男、自分にファロットの一族の事を教えてくれた男…。

深呼吸してカールは男の名を呼ぶ。

「レックス・ソウル…」

名前を呼ばれて、初めて男の表情に変化があった。お世辞にも好意的とはいえない、獰猛な笑みだった。

レックスは再会を懐かしむつもりは無いらしい。無表情に戻り、イヤホンマイクを耳

に取り付け部屋にあるテレビを指差した。

「ふむ、その質問に答えても良いが、お前が知りたいのはあっちだろう」

カールがブラウン管に目を移すと、そこにはクリスとアリスが映っていた。ここと同じような部屋で同じように縛られている。まだ2人の意識は戻っていないらしい。

「この映像はLIVEでな。向こうにいる俺の仲間にこのマイクで指示ができる。イタチ！」

クリスとアリスしか映っていなかった画面に、短刀を持った新しい人影が入り込む。イタチだ。レックスの声が聞こえたのだろう。カメラに向かって小さく手を振った。

「どういうことだ。おい！何をしようとしている!?!」

「ふむ、もつともな疑問だ。いや実はな、カール、お前にやつてもらいたいことがある。だが俺のやつてもらいたいことは恐らくお前のやりたくないことな訳だ。」

ここまで言われればカールにもレックスが何を言いたいのかが分かってきた。興味なさのうにテレビの画面を見たままレックスが言葉を続ける。

「まあ分かりやすく言えばお前の子供たちは人質というわけだ」

「何が望みだ…」

激しい怒りを目に宿したカールがレックスに尋ねる。

「端的に言おう。子供たちを殺されたくなければ、」

レックスが一度言葉を区切る。ブラウン管の電子音が響く室内にカールのつばを飲み込む音が混じる。

「影の生き残りを皆殺しにしろ」

カールは目を閉じ、深呼吸してから答える。

「断る」

「よし、やれ」

予想していた回答だったのだろう。間髪いれずにレックスはイタチに指示を出す。

イタチは短刀を構え、

カールが静止の言葉を発する時間も与えず、

短刀を横に振りぬく。

「え」

カールが気づいた時には、

クリストファー・マダックスの生首が画面の中で飛んでいた。

レックスはテレビの電源を消す。完全に無音になった室内。カールの荒い呼吸だけが響く。

茫然自失のカールは部屋に新しく入ってきた男に気づくことすらできなかつた。

「マダックス君、スペシャルゲストだ！彼は驚くことに魔法使いでね、人に言うことを無

理やりきかせる”服従の呪文”という便利な魔法が使えるそうだ」

うつろな目のカールはレックスの言葉に反応しない。

「ふむ、心が折れてしまったかな。まあいい。やってくれ」

「あ…」

何も言葉を紡ぐことができないまま、カールは服従の呪文を浴びてしまう。

部屋のドアが開きイタチが室内に入ってきた。レックスはイタチを一瞥し、

「いつまで化けているつもりだ。レテイシア」

衝撃の事実を口にする。

魔法使いの姿はもうすでに部屋の中には無い。

「計画通りだな」

「イタチがいなけりやこんなもんだよ」

うなだれているカールを無視して2人は会話をする。

「しかし魔法使いとも繋がっていたとはねえ」

「イギリスのとあるならず者の紹介でな。金さえ積みれば大抵のことはやってくれる便利なお友達だ」

「あっそ」

レテイシアの興味はわかかなかったらしい。

「それでだレティシア。個人的にお前に仕事を依頼したい」

ニヤリと笑ってレックスが口を開く。

レックスの依頼はレティシアの興味を大いにそそるものだった。

イタチがカールの刀を止め、カールの首にナイフを突き刺す。そこにレティシアの石の礫が襲う。イタチはそれを認識しつつも、自分がナイフで刺した相手がカールだったことに気づく。

この一連の流れ、実際のところ時間にすれば1秒にも満たない、コンマ数秒の出来事である。

イザナギという、うちのはの禁術を使ってまでマリオを助けようとしたイタチ。

マリオの死を確信したレティシア。

状況を掴めていないマリオ。

ここで彼らの誰もが予想しない出来事が起こる。

結論から言おう。

レティシアが飛ばした2つの礫。1つはマリオの脳天に命中。そしてもう1つはイタチが今まで立っていた地面にめり込んだ。

マリオは即死。しかしイタチの姿はどこにも見えない。

レテイシアが周囲を探るが、姿どころか気配すら無い。

(どういふことだ……?)

イタチは、

その場から姿を消したのである。

一番驚いたのはイタチである。

今レテイシアの礫に対処しようとしていたにも関わらず、イタチは全く別の場所に立っていた。

(口寄せか時空間忍術で移動したときの感覚に近い……。何が起こった)

そもそも先ほどまでは夜中だったが、今イタチがいる場所は少し明るい。感覚的には早朝である。

先ほどは森の中だったが、今いる場所から見えるのは田園風景だ。はっきり言って以前の世界に近い雰囲気である。

(まさか、元の世界に生き返ったのか?)

何か手がかりはないかと、イタチは周囲を見渡す。

あるのは木々と田んぼと、後はイタチのへそほどの高さの、少し大きめの古臭い石碑だけだ。

だがイタチはその石碑から眼が離せなかった。

ちなみにだが、今の今まで戦闘をしていたイタチの眼は写輪眼のままである。

だからこそイタチはその石碑から眼が離せなかったとも言える。

その石碑には、写輪眼を開眼したうちは一族しか読めない文字でこう記されていた。

我、コノ世ニ渡リ

大地ノ理ヲ識リ

千手ト同ジカヲ得

コノ世ヲ救ウ為立チ上ガル者也

日本編

1987年1月 ②

1987年1月8日

レティシアは困惑していた。

イタチを除いた影に関しては処理が完了したが、イタチの姿が完全に消えてしまったのだ。シアンを使っても気配の片鱗すら捕えられない。

(こうなると死んでるか、感知が及ばないほど遠い場所にいるとしか考えられないんだが……。イタチの表情からすると、あいつの術ではなく別の魔法だろうなあ)

カールの手から「例の宝剣」が無くなっていることからあの刀がポートキーだとは思うが、カールが触った時もレティシアが触れた時も何も起きなかったことは疑問だ。

あの刀はリチャードからレックスに本作戦のため渡されたものである。となると、あの2人のどちらかはこうなることを予想していた可能性が高い。

とはいえ、レックスからの依頼は去年の夏に少し変更になったので、実のところイタチはどつかで生きていてくれた方が都合が良いかもしれない。

レティシアはしばらく色々と考えていたが、この思考自体が無駄であると悟ったのだ

ろう。レックスから依頼された次の新しい仕事に頭を切り替えた。

(イタチとの戦いもなかなか面白かったけど、レックスのおっさんの新しい依頼もかなりテンション上がるんだよね)

レティシアは死屍累々の影のアジトを振り返ることなく、森の闇の中へ歩いて行った。

1987年1月9日

うちはイタチは極めて日本的な田園風景の中、状況がつかめずに呆然としていた。

命のやり取りをしていた状況から一転、恐らく自分の知らない場所に物理的に飛ばされ、そこいは写輪眼でしか内容を読めない石碑があつたのだ。混乱するなという方が無理である。

とはいえ、このまま突っ立っているわけにもいかない。イタチは冷静に状況を判断しようとする。

まず現状が幻術の類でないことを確認。

イタチの感知できる範囲には見知ったチャクラどころか、人間の気配すら感じない。かなり離れた位置に、今まで感知したことのないかなり大きなチャクラがある気もするが、相当離れているだろうしひとまず今は関係なさそうだ。

やはり自分は何らかの手段でどこかに飛ばされたのだろう。そしてその原因は間違
いなく、

(この古い刀だろう…)

服従の呪文をかけられたカールが、マリオを殺そうとしたときに取り出した武器。古
いなんてものではなく、作られてから恐らく数百年ではきかない。千年か二千年か、下
手したらもつと昔に作られたものだと思われる。

長さは一般的な刀と同じか少し長い程度。2尺8寸程はある。しかしあまりに古す
ぎて実戦ではまともに使えないだろう。錆は無いが切れ味もほとんどないに等しい。
この世界において魔法がいつ頃からあったのかは不明だが、チャクラに似た力がこの刀
に纏っている…というか刃の内側にも練りこまれているような感じだ。

この古い刀に時空間移動系統の何らかの術が施されていたのだろう。

しかしこれを持っていたカールは武器として使用していても、どこかに飛ばされるこ
とはなかった。イタチにしか効果のないように、この世界の魔法使いが刀に術をかけた
とでも言うのか。

何故か妙に自分の手にしっくりくる刀。だがそれはまあ良い。

イタチは刀を手放し石碑の裏の地面に埋める。

(原因は大体分かった。とりあえずはあの刀に触らなければ良いだろう)

クリスとアリスのことも気がかりだが、一番の懸案事項は「ここは一体どこなのか」ということだ。イタチは古い石碑を鋭く睨む。

「まずは情報収集だな…」

朝日が眩しく、眼を細めながら片手で影を作り、イタチはそう呟いた。

自分のやることを決めてからのイタチの行動は早かった。

田んぼがあると云う事は、近くに管理する人間が暮らしていると云う事。人が住んでいると云う事は、元の世界なら徒歩圏内に、新しい世界ならガソリン車の移動範囲内に町が少なくとも集落は存在するという事である。

早朝の散歩で歩いてきた老人に近づき、幻術をかけ情報を引き出す。

結論から言うと、この世界はこの約8年間イタチが過ごした新しい世界だった。この場所は日本という国で、イタチが先ほどまでいた場所からおよそ8000kmも離れた場所である。驚くべきことに、この国の言語は以前いた世界と同じであった。

老人がたまたま持っていた地図を見ると、老人が現在位置と指さしたところには「岩手県遠野市」と書かれていた。

（日本…遠野…。どこかで聞き覚えがある名詞だ…思い出せ）

『イタチの幼稚園の話、明日話してみようね』

『何度も言うけど、ママはイタチを日本の幼稚園に入園させる事に反対しないと思うわ

よ！むしろ魔法省が私の退職を渋る可能性の方が圧倒的に高いわ！』

(アンナが12歳まで暮らしていた場所だ：)

偶然なのか必然なのか。イタチが飛んだ日本の岩手県遠野市はアンナとその夫（つまりこの世界におけるイタチの両親）の故郷である。

イタチは父方の実家に寄ることも少し考えたが、そもそも自分はイギリスにおいて生死不明で行方不明である。あまり大ごとになっても面倒だと思いいその考えを却下した。行くにしても身分を明かすことは無いだろう。

ここまで分かれば、何らかの手段を以てイラクに飛び、クリスとアリスの搜索をしてもいいのだが、イタチにはどうしても気になることがあった。

例の石碑である。

我、コノ世ニ渡リ

大地ノ理ヲ識リ

千手ト同じ力ヲ得

コノ世ヲ救ウ為立チ上ガル者也

これを書いた人物は、俺もいた以前の世界から来ていて、尚且つ写輪眼の扱えるうちは一族である可能性が非常に高い。

大地の理、千手と同じ力というのは『木遁』のことだろうか。何からこの世を救おう

としたのか。結果救えたのか。そもそもこれが書かれたのはいつの事なのか。

この世界の事、以前の世界の事、これはイタチの勘だが、今知らなくては一生分からないままになる気がしてならない。

クリスとアリスの事も気になるが、イタチはこの石碑を作った人物について調べるところを優先することにした。

フアロット一族の歴史はかなり長い。

フアロットの長のみが見ることが出来る過去の書物によれば、フアロットとしての初めての活動は13世紀前半の、東ローマ帝国とモンゴル帝国との戦いにまで遡る。

その後フアロットは、ヨーロッパや中東を中心に、世界中に暗躍する暗殺組織に成長していった。

フアロットの創始者についての記述はほとんど無いに等しい。

創始者について分かっているのは、シアンを使えたと言う事、そしてフアロットに「宝剣」と呼ばれる刀を武器にして戦っていた事ぐらいである。

ちなみにレックス・ソウルから「影」暗殺の依頼を受け、フアロットの長リチャードは、レックスに宝剣を使うように指示して貸し出した。

「ふむ、今になって考えてみればおかしいことだらけだ…」

照明は一切ついていない、月明かりだけが唯一の光であるその部屋の中で、リチャードは閉じていた目を開き暗闇から響いた声の方向を見つめる。

ここはファロット一族の館、一族の長リチャードの部屋である。部屋と言っても相当広い。約35m×25m、一般的なバスケットコート程の大きさがある。部屋というより玉座の間とも言った方がイメージがしやすいかもしれない。

ちなみにファロットの一族で一番リチャードに信用されているロニーですら3重の手続きを取らない限りリチャードの部屋に入ることには出来ない。

つまり、部屋の中で急に自分以外の声がすると言う事は、緊急事態以外の何物でもないのだ。

だがりチャードは一切動揺することなく闇の中に声をかける。

「何の話か知らないが、こう対面するのはおよそ20年ぶりか…。レックス」

コツ、コツと足音がリチャードに近づき、声をかけられた男、レックス・ソウルの顔が月明かりに照らされる。

「ふむ、正確には22年ぶりだな。おや、左目を怪我しているようだが大丈夫かね？」

薄い笑みを顔に張り付け、レックスは言葉をつづける。

「兄者よ…」

いつの間に抜刀したのか、2人の持っている短刀が同時に月明かりの光を弾いた。

「それで、一体何の用だ？我が弟レックス」

「しっかりと抜刀しておいてよく言う」

レックスは短刀の切っ先をリチャードに向ける。

「俺の人生の目標はたったの2つだ。1つはうちはイタチに地獄を見せる事。そしてもう1つは……」

「言ってみろ」

リチャードは無表情のまま先を促す。

「ファロット一族を滅ぼすことだ」

そう言うのと、レックスはファロットの長に向かい、短刀を片手に突進した。

1987年1月14日

イタチがこの世界に来たであろう。うちは一族を調べ始めて1週間が経った。

ここ1週間、イタチは日中は市の図書館。夜は野宿という生活を送っている。

この1週間で分かったことをまとめると、まずあの石碑が立てられたのは鎌倉時代初期。13世紀前半である。

製作者の名は一切不明だが、その製作者には息子が2人いたと文献には記されている。

その2人の息子の名前は、「うちはカムイ」と「うちはツクヨ」。

ここまで来ると、製作者は写輪眼を開眼、下手したら万華鏡写輪眼を開眼したうちの一族で間違いない。

兄のうちはカムイは大人になると家を飛び出て自由に暮らし、弟のツクヨは生涯を遠野で過ごし、うちはの一族を代々と繋いでいったとのことである。

つまり…

(この世界において、うちはツクヨの子孫が俺になるという訳か)

図書館で調べられることは全て調べ終わったので、イタチは足を使い他の石碑を探すことにした。

製作者は晩年、ツクヨに手伝ってもらい、妖怪から遠野を守るための結界という名目で石碑を複数個立てたとある。

(石碑同士の大体の距離だけは書いてあったから、最初に発見した石碑を起点にとにかく歩いて探すしかないか…)

カムイとツクヨという名前を子供につけていることから、やはり石碑の製作者は万華鏡写輪眼を開眼していた可能性が高い。思っていたより昔の話で驚いたが、一体製作者は誰なのか。

そもそも万華鏡写輪眼を開眼したのは、イタチの知る限りうちはマダラ、イズナ、シ

スイ、イタチ、サスケ、一族ではないがはたけカカシぐらいである。

そんなことを考えながら石碑の所まで来たが、石碑を見ることは叶わなかった。

散歩でもしていたのか、60代ほどの老人が石碑に腰かけてクリームパンとビンの牛乳を手に休憩していた。老人はイタチに気付き声をかける。

「にいちゃん、どうかしたのかい？」

「その石碑に興味がありましてね……」

警戒することはないだろうと、イタチも特に隠すことなく石碑の事をしゃべる。

「ほお。こんな古ぼけた石碑をのお。同じ時代に立てられたほかの石碑も見たかい？」

よつこらせ、と石碑からどきながら老人が口を開く。

「他の石碑の場所を知っているのか？」

「地元じゃからの。地図はあるかい？」

イタチが地図（遠野市の観光案内のパンフレットだが）を取り出すと、ボールペンで3か所にマークを付ける。

「これで全部じゃ。ここの石碑はかなり山奥だから昼間に行った方がいいぞ」

「恩に着る」

イタチは老人に感謝を伝え、教えてもらった場所に向かおうと背を向ける。するとその背中に老人から声がかかった。

「にいちちゃん、名前はなんて言うんだい？」

イタチは振り返らずに答える。

「うちはイタチだ」

老人に教えてもらった3か所の内2か所を回り、残る石碑はあと1つだ。2つともイタチにとって衝撃の内容で、正直自分の中でまだ整理が出来ていない。

もう日も沈み、真つ暗だがイタチは気にせず3つ目の石碑に向かう。老人に「昼間に行け」と言われた場所である。

けもの道をかき分け、最後の石碑にたどり着いたイタチ。写輪眼で内容を読み取った。

(幻術……いや、結界か……?)

イタチが瞳を写輪眼に変えてから、周りの空気が変わった。気が付けば周りを人ではない、魑魅魍魎に囲まれている。こいつらは今にもイタチに襲い掛かろうと殺気立っていた。

急に現れた別世界の化け物たちに、イタチは別段慌てることなく、むしろ少しの笑みを浮かべながら声をかけた。

「ふっ、お前たち博物館とやらで展示されていたぞ。確か「妖怪」だったか……」

挑発されたことを理解したのだろうか、妖怪たちはイタチに飛びかかってきた。

場面は変わってファロットの館。

一族の長の部屋で殺し合いが行われている。ファロット一族の長リチャード・ファロットと、アメリカ軍のジェネラル、レックス・ソウルの2人による激しい戦闘である。お互い獲物は短刀。技術的にはリチャードが上、膂力ではレックスが上だろうか。5分以上短刀を打ち合っている。

「腕を上げたな。レックス」

「ふむ、前より兄者の死角が多いからな」

短刀を弾き合い会話をする。

「我の左目を抉ったのはお前だろう。レックス」

言いながらリチャードは短刀を横一閃に振りきる。受けたレックスは後方に下がりを2人の間に5mほどの距離が出来る。

レックスはリチャードの死角、つまり左目側から攻撃を仕掛けようとした。

「しかしだ…」

リチャードはレックスの攻撃を見もせず弾く。

「貴様はファロット一族の長というものを過小評価してはいないか？」

そう宣言してからリチャードの動きが変わった。レックスの攻撃がスピードに乗り

切る前に全て打ち返し、レックスは防戦一方になってしまふ。

「チイッ」

舌打ちしながらレックスは後ろに飛びのく。

(甘く見ていた…。リチャード・ファロット、こいつは俺より強い…)

ギリギリと奥歯を噛みしめるレックス。

子供のころから、レックスはリチャードに勝てるものが無かった。力でも、頭脳でも、人徳でも、素早さでも、目の良さでも…。

レックスは鬱屈した人間だった。実力はあるのに、ただ一人兄にだけ敵わない。22年前、当然のごとくファロットの長候補は兄のリチャードになった。

リチャードが長になれば、一生兄の命令で最前線で戦うことになる。レックスはそんな屈辱に耐えられる気がしなかった。

だからあの日、当時の長との修行が終わり、疲れ切っている兄に喧嘩を吹っかけ左目を抉りとり、ファロットの一族から抜けたのだ。

殺す気で戦ったのに、左目を潰すのが精いっぱいだった。その事実もレックスのプライドをいたく傷つけることとなった。

いつ追手が来るのかと、ずっと警戒していたレックスだが、結局一度も追手が襲ってくることは無かった。間違いなくリチャードの指示だ。

レックスのプライドは20年以上ズタズタであった。

そして今また手も足も出せず、ついにリチャードに殺されようとしている。

「終わりだ。最後は我の手で送ってやる」

リチャードはレックスの短刀を掬い上げた。短刀はレックスの手を離れ宙に浮かぶ。

リチャードの短刀がレックスに迫る。レックスの手には武器もない。

「クソツタレ……」

レックスの最後の言葉だろう。リチャードは少し悲しそうな顔をしてレックスを突き刺そうとする。

「遅えんだよ」

突如、リチャードの巨体が横に吹き飛んだ。

「何ッ!?!」

突然の横からの攻撃。なんとか受けることは出来たがバランスを崩し、リチャードは片膝を床につく。

「貴様……!」

襲撃者を睨むリチャード。襲撃者の正体は、相変わらずヘラヘラした顔で笑うレティシアだった。

「よお、久しぶりー!そして死ぬ」

恐ろしい速度でリチャードに迫るレティシア。リチャードはまだ姿勢を崩したままだ。レックスもレティシアも勝利を確信した。

だがその攻撃は1人のファロットによって阻止される。

「久しぶりだね。反抗期かな？レティシア」

リチャードとレティシアの間に入ってレティシアの一撃を止めたのは、ロニー・ファロットだった。

「ロニー…ソ連で重要任務じゃなかったっけ？」

「いや、ファロットの長が殺される方が重大じゃないかな」

ニコニコと笑いながらレティシアの猛攻を受けきるロニー。ファロットNo. 2の実力は伊達ではない。

「さて…」

レティシアの背後からリチャードの声がする。

レティシアが振り向くと、視線の先には血を流して倒れているレックスと、レックスの服で刀身の血を拭いているリチャードがいた。

レティシアは、ファロット一族の天才ファロット一族の長No. 2に挟まれてしまう。

「待て!!」

ドスのきいた制止の声に妖怪たちの動きが止まる。3mはあるだろうか、巨大な妖怪がイタチの目の前に立っていた。

肩幅の広い人型の化け物である。仮面のような細い目に細い口。額から上に向かってかなり長い角が一本突き立っている。

左手に細長い棒状の武器を持ち、むき出しの太い腕は人間なんてたやすく握りつぶすだろう。

しかしイタチは動じない。

「文献にあつたな。長い角を持つ蛇の妖怪…一鬼ひとしき…」

一鬼と呼ばれた妖怪は豪快な声で笑う。

「おうおう一鬼よ。人間、よく知っているな。しかし驚いたぞ。このオレを間近で見て恐れないなんてな」

一鬼はこのあたりの妖怪のリーダーなのか、一鬼が話している間、ほかの妖怪たちは一切口を挟まない。

「…妖怪たちと争う気は無い」

無表情でイタチが返す。

「妖怪バケモノよりも妖と言われた方がしつくりくるが、まあそれは良い。『此処』に来ておいて争う気は無いと!! たわけたことを言う!!」

「此処というのはどういう事だ？」

一鬼の言葉に、そうだそうだと周りの妖も騒ぎ立て、イタチの声は誰にも届かない。

「問答無用!!」

今の今まで問答していたくせに、一鬼は突然持っていた巨大な棒を薙ぎ払いイタチに攻撃する。上に飛び避けるイタチ。

一鬼が棒を払うと、そこにあつた草も木も岩でさえも全て砕けていた。凄まじい破壊力である。

（一鬼を幻術に嵌めた所で他の妖が止まらないか…）

面倒なことになったと、ため息をつくイタチだった。

リチャードとロニーの猛攻を一人で受け続けるレティシア。

まだ一撃も受けていないのは奇跡に近い。とリチャードとロニーは考えている。

対するレティシアは意外なほど落ち着いていた。2人の攻撃が見える。感じる。半年前の自分だったらもう殺されているかもしれない。

しかし2人の攻撃はいつまでたつてもかすりもしない。

（ああ、そう言う事か…）

一鬼の攻撃手段は棒だけではない。角も使うし、体中から蛇を出して相手に巻きつけることが出来る。

しかしどの攻撃もイタチには当たらない。

「馬鹿な!?!オレの攻撃が当たらないだど!?!」

(最近レレテイシアとばかり戦っていたからな…)

1987年1月14日 22:00

それぞれの現地時間、同じ日同じ時間に2人は口を開く。

「お前、レレテイシアより弱いしな」

「お前ら、イタチより弱いしな」

2人の反撃が始まる。